女學雜誌

版權所有

各土曜日出版

第百六拾貳號

當府内無郵税

一册六錢

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 162. May 18th, 1889.

EDITORIALS:—Garment.

CRITICAL NOTES:—"Oyae."

LEADING ARTICLES:—The Condition of the Belle. by Mr. K. Kimura.

MISCELLANEOUS:—"The Influence of Superior Wives." "Names of Plays." "Literature and Nature." "Parting"

DROLLERY.

CHILDREN'S COLUMN.

BIOGRAPHIES:—Pestalozzi.

NOVELS.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

第百六十二號目錄

社説 衣服論

批評 忍月居士の「お八重」(藤の屋主人)

論説 佳人の状况(木村熊二)

雜録 賢夫人感化力○外題○國民之友第五十號「文學と自然」を讀むを謹讀す○離別(湖處子)○茶話三○玉堂隨筆

兒籃 子供の旅路(友輔軒)

史傳 教育大宗ペスタロッチ(かすみ)

小説 あるのん物語(美妙齋)○酒鬼(藤庵主人)

寄書 歌三首○女子の文學に付ての駁論の横鎗(湯谷磋一)

開書 同志社大學慈善音樂會發起者に送る○之に答ふるの書

時事 如此きの教育家○感化院○團十郎とお軽○山川氏の母勝賢院○佛國に於ける萬國婦人會○親の老少と小供の强弱○第一の女編輯家

片々 皇后陛下御誕辰○其他十四件

外報 男女の心臟○支那の傳道○其他五件

WOMEN IN JAPAN.

(1) *The Woman's Temperance Union of Tokyo proposes to petition the government about abolishing licensed concubinage, and of affixing similar penalty to adultory in men as in women. Mrs. Hatsu Uwasa attacks concubinage as unnatural, as destroying happiness in the home, as doing incalculable injury to children, and advocates Christianity as the only religion by which social purity can be attained.*

(2) *It is a remarkable fact that prominent persons like Count Itō, Prince Sanjō, Prof. Nakamura, and Viscount Yamawo are warmly advocating prison reform. It is to be hoped that women like E. Fry and S. Martin would appear to supplement their endeavours.*

(3) *The semiannul Prayer Meeting of the Tokyo and Yokohama ladies was held at Kaigan Church in Yokohama. Over 500 were assembled in the P. M. when it was decided to present a copy of the complete translation of the Bible to H. I. M. the Empress on her birthday, the 28 of this month.*

(4) *The Literary Society of "The American Mission House" called "Kenshu Kwai" has sent us an interesting history of its 8 years existence in the school. Every encouragement is desirable in the line of Japanese literature in these mission schools where English has been hitherto made more or less a specialty.*

(5) *24 nurses were graduated at the Great Conference of The Red Cross Society.*

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百六十二號 明治二十二年五月十八日發兌

社說

○衣服論

左は編者が去る十日橫濱布惠利須女學校の需めに應じて演述したるものゝ大意なり、同校は基督敎宣敎師に由りて立られ其生徒も多くは基督敎信徒なるが故に、玆に說く所ろ特に之に傾むけるの論理少なからじ、讀者幸はひ諒せよ、(筆記者誌)。

昔し都に一休法師と云へる和尙ありけり、奇拔なる悟り手にて名知識の聞え天下に響き渡りしかば、之を招待して一日の來臨を請ひ末代迄の家の譽れと爲さんとせしものも多かりしと云へり。斯る望みにてもありしか、其比ろ何某と云ふ物持ありて或る時和尙を懇待したるにぞ、一休は快ろよく承諾し、扨て其約束の日の前晚、古びたる衣を着、破れたる草鞋を穿ち、碎けたる鉢を持ち、杖を引きて彼の物持の門前に立ち云はく、宿を得ざる旅びの空の貧僧なり願はくは一夜の惠みを與へ玉へと、下男明日の用意にや庭を掃き草を取りてありしが、つく〴〵と見て威武高に怒り、此の御大家には汝ち達を宿すべき庇もあらずとく〳〵立ち去れ、と云ふ、願はくは强いてと押反して云へば彌よ怒り、箒を擧げて打ち掛らんとして大聲に罵しりしかば、主人は何事ぞと思ひて出で來りしに坊守の餘りに烏亂なるを見て同じく叱り散らし、早々に追拂へと云つて水を注ぎかぶせたり。然るに其の翌る日は一休常よりも美々しく裝ほひ、紫の衣も、錦襴の袈裟、惡魔降伏の拂子、侶まはり業々しく、アツパレ、大僧正と見ゆる有樣にて來りしかば、曩の下男も主人も蜘蛛の如くに平伏して敬まひ勞らへり。其時一休突然と座を立ち、袈裟衣もを脫ぎ棄てゝ再たび昨夜の貧僧となり、逸足して逃出したり、主人何事とも知らず大ひに惶てゝ追かけ、不肖の御もてなし何か御意に反きしとあらば平に容し玉へと云ふに、一休極めて無雜作に、どうして〳〵貴君はアノ衣と袈裟をこそ御招待なさるゝならん、一休の身は在りとも無くとも同じからんと存ずればお暇ま申すなり、何卒彼の衣服を鄭寧に遇ひ玉はれと云つて走り出せり(大笑)。

如此き話しを聞けば實に笑ふべきことのやうなれども、余が見る所ろに由れば人世の事多くは只だ衣服を崇拜するものゝ如くに見ゆるなり。彼の禮式なるものは素と交際上の中和を尊とみし主意に出で、必竟溢るゝ所ろの愛情を程好く制し現はすとの意味ならんに、今の禮式なるものは只だ一種の外面の虛禮となれり。人の風采なるものは、本來心裡の德性智性

の發輝する光りの如く、其内に密みたる榮光を現わすに由りて美くしきとなるが、今の風采を論ずるものは只だ人の外面容貌を品評するに止まる。言語は思ひを現わすもの、議論は考へを現わすものなるが、今の言語議論を評するものは只だ言語議論夫れ自らを尊とむにあり、即はち言ばを美にし、議論の爲に議論し、徒らに空を摸つて空を握むが如きに止まる。其他事業を爲すもの、政治家と爲るもの、文學の筆を執るもの等を見よ、何れも事業なるが故に事業し、政治なるが故に政治し、文學なるが故に文學を爲すが如くにて、抑そも其の事業は或る事を爲し遂ぐるに由りて尊とく、政治は或る功を達するが爲めに尊とく、文學は或る目的を成就するが故に尊としと云ふ如き所存尤も少なし。之れ皆な此等の者を包む所ろの外皮を見て、中に存する所ろの其の精に注意せぬとにてあらんと思わるゝが、尤も悲しきは彼の宗教の事に至りても尚ほ多くは外面の衣服に止まり存すると也、例ば偶像と云へる一寸八分の尊像は何が故に尊ときか、若し之を或る尊ときものを代表するものと爲さば即はち之れ代表にして其の奥に實の尊とむべきものを存するならん、木にて造り石にて刻みしもの夫れ自らには何の功徳もあるまじき筈なり。之よりして或は草木山川を禮拜し、或は八百万の神を禮拜するなど皆な或る一つの尤も至尊なるものを現わす所ろの衣物なりと思わるゝに、今の人は只だ此の衣物を見て其の中に包まれしものを認めず。彼の一神教を信ずると云ふ基督教に於ても、或は聖書、或は洗禮、或は晩餐、或は教會、或は信徒と云へる名目の如きもの、即はち皆な夫れ〳〵に或る奥深き意味高き極めて神潔なる所ろの精を現わすの衣物をば只だ夫自らの儘に崇拜するの弊あるに至る。　天下至る所ろとして衣物を拜せざるものなし。

然るに人間の天性は決して外面をのみ見て安んずるものにあらず、成るべく奥深く底深く穿ち入らんとするの天性あるものなり、先づ子供に一箇のヲモチヤを與へよ、彼は只だ之を眺めて其儘にして弄ぶのみには滿足せず、必らず之を破り砕き中には何物やあると穿鑿するなり。　如此く人間は其の天性に於て決して外面のみにて安んずるものにあらず、或は理學より、或は化學により、或は哲學的の研究により、或は愛に基づける信仰によりて、奥へ〳〵と穿ち入るあり。今日此の自然界を見て古人の如く淡泊に其の外現象にのみ感服するものはあらず、必らず更らに一段數段の内部に立ち入り、

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

深く其の内に隱るゝ所ろの元理を研究するが如し。　人の交際上の事に付て言わんにも、人の先づ愛するの尤も低きは他の容貌如何と云ふヿにあり、然るに更に進みては他の經歷地位方向と云へるものゝ如きに關するヿとなるが、更に一等進みては、他の才力は何如ん道德は如何ん人物は如何んと云へるものゝ如きに關す、此に至りて相愛する既に甚はだ深きに達せし樣なれども、之にては未だ十分と云ふ可らず、斯ては其人の才力を愛するなり道德を愛するなり人物を愛するなり而して其人なるものを愛するにあらず、故に教師の其弟子に於ける朋友の其友人に於けるの愛は大抵只如此なる中にも、親が子に於ける、夫婦が其伴侶に於けるの愛は更に一等深し、即はち彼等は他の過ち、傷、癖を凝めたるのタマシヒをば其の不完全のまゝにて愛するなり、此に至りて眞成終極の愛を得たりと云ふべく、人の交際は遂に此に至らずんば決して滿足するヿを得ず。　左れば人間の天性は敢て外面に止まるものにあらず、虛飾を崇拜するものにあらず、即はち衣服をのみ尊とむものにあらず。

然し人は其の理想の甚はだ高大なる割りに其の實際の行ひの中々高大なるヿを得ざるものなれば、假令ひ其天性は何如に衣服に安んぜざるものなりとは云へ、今日の實勢滔々として皆な衣服の崇拜者たるを何如んせん。固より羽織より一段を穿ちて上衣に至りしもあり、上衣より一段を穿ちて下衣に至りしもあり、下衣より更ゝ一段を穿ちてシャツ莫大小に至りしもあれども、要するに倘ほ皆衣服に關はるヿを免れず、其の衣服にて包む所ろの本粹に到着したるものは實に極めて少なし。　然るに家の結構は其の礎に在る如く、大球の運動は其の中心に在る如く、先づ尤も深き所ろ尤も源づく所ろに於て善ならずんば外に現わるゝ所ろ決して善なるを得ず、人もし萬國を得るとも其の生命を失わば何の益あらんや、大凡そ總べてよりも尊ときは其のイノチ、其の粹、其の精なるものにあり。　何等の改良何等の事業も、先づ此の根底よりして發せずんば極めて力ら弱わし。

扨て當學校の主義、諸君の主義、恐らくは基督教の主義よりして言わんには、「神」と云へるヿこそ是れ萬物萬法の大根底なるが如し、宇宙の粹、人類の精、千萬の現象のイノチ皆な此の「神」と云へる一語に在る如く思わるゝなり。　故に基督教を奉ずる人々の覺悟何如んと問ふときは、先づ此の神に從ふと云ふヿ、次に此の神を人に教ゆると云ふヿ、三に此の神

の意を萬事に吹込むと云ふヿ、以上凡そ三つの事によりて大抵概括せらるゝやうに思ふ也。然るに此つ三つの事を更に切言すれば「入神」と云へるヿにて、余が考へには基督教徒一生の義務は「入神」の外にあらずと思ふなり。先づ自から罪を悔ひて其の徳を立ると云ふヿ此は即はち其の一身の中に神を入るゝなり、次に人を愛し之に傳道し世を愛し之に善業を爲すと云ふヿ即はち人の中に世の中の中に神を入るゝなり、故に基督教徒の惣べての義務は「入神」にあり、言ひ換れば「傳道」にあり、其の在る所ろの地位の何の境界たるを問わず、其云ふ所ろの人の何人たるを問わず、之に向つて入神し傳道するヿと云ふところ即はち彼等が決局の務めなるべし。然るに神を入るゝと云ふは神の精神を入るゝと云ふに同じきとゆへ、即はち正しきと潔ぎよきと公直なると愛深きと等を吹入るゝと云ふと同様にて、信徒たらんものは何處に行くとも皆な此の責任を負へり、商賈するものは商海に此の精神を吹込め、事業を爲すものは事業社會に此の精神を吹込め、政治家學者文學者其の何人たるに拘はらず其の在る所ろの地位に於て悉く此の精神を吹込むべし。故に宣教師は吾獨り傳道すると思ふ勿れ、無宣教者は吾は傳道するものにあらずと思ふ勿れ、惣べての基督教徒は悉とく皆な傳道師なり、王侯は王侯の職に於て役夫は役夫の地位に於て皆な夫々に傳道師なり。故に何れも皆な彼の精神の吹込手、悪社會の改革者、其の一身存する四方の光りたり鹽たらざる可らず。

責任既に如此くなれば其の働らきの覺悟も亦た一種大ひに異ならざる可らず、即はち彼等は尤も深く根底に入り斷へて外面的の衣服に頓着す可らず。昔しポウロと云へる熱信なる傳道者あり、彼れ嘗て慷慨して云く「吾は福音を恥とせず」と。此の一句千鈞の重みありとして古來多く引かれ賛めらるゝヿあるが、余は最初深く之を不審に思ひたり、抑そも福音を恥とせずと云へば何事か之に恥とすべき道理の存すると云ふが如し、若しポウロにして如此く云はゞ即はち之れ彼が尤も弱はき所ろを現はせしにて、寧ろ彼が信仰の薄弱なるヿを示せし也、亦何にぞ之を賛むるヿあらんとは思ひたり。然るに再考するに之れ決して然らず、窃かにポウロが斯く言ひし當時の心中を察するに實に彼が信仰の堅固なると感歎に堪ゆべし。思ふに彼の税吏となり漁師と爲り口に一丁字なく元來甚はだ下賤なる職業を取り居たるペテロ、ヨハネ、の如き弟子等は、主すでに復活し玉へりと聞見してよりは其勇氣絶頂

に登り、吾等見し事聞しとは言わざるを得ずと云つて熱心に傳道したり、此時に當りて彼等が心中には其傳道を大ひに榮えありとするのみならず、何人が見るとも亦必らず之を榮えありとすべしと想像したり、敢て他に之を卑しみ其說を貶するが如き異道理の在とも想像し得ざりしならん。然るにポウロは身タルソに生れ、當時最高の學問を研究し、生れて大膽あり頗ぶる四方の志を懷きつるに、一朝改悔して基督の徒弟となりしより、前非飜反して殆んど別人の如く、極めて謙遜柔和に極めて質朴貧相に、アンテチケ、エペソ、ニコポリスに傳道して遂にアテンスに至り、アレチ山上に立ちて學者智者の面前に說敎したり。此時彼は哲學を知るに拘らず、政治論を述べ得るに拘らず、論理法を知悉するに拘らず、言ふ所ろは生理學哲學にも反對するが如くに見ゆる主復活の事あり、而して若しペテロ、ヨハネの徒にてありしならんには毫末の想像をも走らし得ざるとき、ポロウは其聽衆が冷笑して心に否らずと云ひ得るの論理を知り、ゼノ、プラトー、エピキウラスの哲學を知れり、然るに彼は智慧の言葉を用ひず、たゞ愚なる如き議論を爲し、之を冷笑し之を罵倒する所ろのストーイック、アカデミシアン、エピキウリアン等の面前に立ちたり。 亦た英雄の尤も苦く感ずるは多事多難ならざるに在り、世人多くはポウロが水火刀劍の厄に罹りしを大業に云へども、此は蓋し彼に取りて別段の事にあらず、寧ろ彼が勃々燃ゆる如き烈情を抑へて數年靜かに修練したるとき、卑屈にも籠に弔下されてダマスコより逃るゝとき、肉を食わず壯語を吐かず只だ一婦人の如く優柔にせしとき、此時には彼が天性の火情に於て尤も痛苦を感ぜし所ろなるべし。 然るに彼は彼が哲學論を爲さず、亦た彼が尤も快活なる偉業を爲さゞりし、此に於てか彼が「吾は福音を恥とせず」と云へりしの眞情大ひに靈義あるとを覺ゆべし。 天然の盲人はミルトンの盲人とは異なるべし、天然の草履つかみは敗軍の將敵に囚われて草履をつかむとは異なるべし、凡そ元ありし地位若くは元と在るべかりし地位を棄てゝ其然らざるの地位に就くは、本來生れながらにして其地位に在るものと同日の感にあらず。 同じく是れ一軒の茅屋なり、秋夜其の破櫺に月の懸るあり、聞く之れ農夫の家なりと、然らば余は最と物さびしき哀れの氣色やと感ずるのみにて別に情あるなけん、然れども若し此の茅屋は昔し或る高貴の君の住わせ玉ひし御跡なりと聞かば、余が感慨には前と非常の相違あるべし。順德院時世

を歎かせ玉ふて「百敷や古き軒端の忍ぶにも尚余りある昔しなりけり」、李白越中懐古の詩に「越王句踐破呉歸、義士還家盡錦衣、宮女如花滿春殿、只今唯有鷓鴣飛」、と。彼のポウロが當時の學者を見、政治家を見つゝ、密かに昔しを忍びて痛歎し、又當世に慷慨して腕を撫したるの苦辛は、蓋しポウロにあらざるもの丶決して知りがたき所ろならん。但し此は只だ彼が人情を云ふのみ、彼は決して其の傳道を輕しみ昔しの已れを高しとせしにあらず、實に其の傳道の第一に切要有効の者たるとを確信したりと云へども、彼は亦能く學問政治の樂しみを承知したるが故に、則はち亦ペテロ、ヨハチに異りて如此き歎辭をも發するに至りしと知るべし。　左れば今の大ひに爲す有るの青年才子と云へども、傳道事業なるもの丶實に根底の事業、最隱の事業、極貧の事業なるとを知らば、深くポウロの大勇に倣つて大ひに覺悟する所ろあれ。

然るに今の日本社界は騒ぎ立つ時代なり、浮足になり、踊り、わめき、氣遣り歌をうたい、御輿をかつぎ、學者と云ひつるものと神田の若い者と競爭するの時代なり、大凡そ摸倣に長じ、眞似に恥ぢず、万事都々として古來たゞ浮々と暮せしもの丶多き吾國に於て、千古最始の民權自治の事あらんとする曉に際しては、人々の多く騒ぎ立つも隨分無理にあらず。然れども若し今に於て之を以て最も好き覺悟ありと思ふものあらば余は慷歎の極にたへず、特に所云る傳道事業を爲すものに至るまで如此き流行にさそわる丶に至ては、殆んど慟哭にたへざる也。

吾々の事業は根底に入るべし、當に實着なる椽の下の仕事あるべし、若し吾々の頭上に五重の塔を組立るものあらば吾々は甘んじて其の土臺となるべし、彼の舞臺に立つて舞ふものは可成りの人間にても出來るなり、人の見ざる所ろ知らざる所ろ新聞紙の評判なき所ろ廣告するに場所なき所ろに於て尤も忠實に正直に善事業の爲に盡力するものは、抑そも彼の自から傳道すると云ふものにあらずして誰か之を爲さんや。

昔し佐野の渡りに源左衞門尉常世と云へる武士あり、世に容れられずして深く韜晦したりと云へども、其の苦貧の中に梅松櫻を養ふの余裕あり、若し寒にして客を待するに馳走なくんば此の最愛の植木を薪にするの氣象あり、而して更に佳なるは其の廐には瘦たりと云へども馬あり、ちぎれたりと云へども具足一輛あり、錆びたりと云へども長刀あり、若し鎌倉に事ありと云はゞ第一番に馳せ參じて國家に報ひんとするの

愛國心をば貯はへたりし也。嗚呼諸君何を見んとて世に出しや、踊るものは鹿鳴館に在り、ヒゲあるものは馬車にあり。然れども其の最も美なる尤も善なるの人間は反つて茅屋人に見られざるの內にある也。

左れば諸君敢て外に現はるゝを以て尊と云べきの職業なりとすると勿れ、目は明らかにして美なり、顔ばせば花の如くにして美なり、然れども其の尤も美なるの靈魂は其の在所を人に現わすとなし、人に見ゆるものは豈に必らず尊とからんや。古來云く女は內を守るもの也と、余も亦た今に至るまで之を確信す、然れども余の所云る內なるものは極めて大ひなるの內あり、願くは外を望む勿れ、外飾を望む勿れ、衣服を望む勿れ、諸君の尤も望むべき所ろは實に內にあり、粹にあり、精にあり。

故に諸君は其の着物に於ても、其交際に於ても、其の禮義に於ても、其の書を讀むの上に於ても、其の宗敎を信ずるの上に於ても、願は衣服を尊とまずして其の粹を尊とめ。而して之を敎育せらるゝ所ろの敎員諸君は、願くは、其敎育の外面に僻せず、其說敎の外面に僻せず、切に其の精神の衣服以內に徹せんとを。蠑螺其の殼を硬くし了るとき肉先づ腐らば果して何の益かあらん。

批評

○忍月居士の「お八重」(其二)　藤の屋主人

脚色は面白くなしト評するより外なし。若し一歩を進めて曰へば、如何に忍月居士は辨護し給ふとも……「お八重」は娘節用と連理之梅より脫化したるものあり。縱令脫化せしにあらずトのたまふとも著者が腦中に浸染せし爲永松亭派の趣向筆に顯はれしものならん。勿論脚色は小說の末技には相違なけれど——若し人情の秘奧を曲寫すれば陳套の脚色猶ほ許すべしと雖ども「お八重」は果して人情の秘奧を曲寫せしものか。連理之梅は凡作なれば問はず、娘節用の肺腑に立入りし筆に到つては余の常に敬服する處なり。小三は金五郎の實父より許されしものなれども義理にからまれて自害すればこそ涙を催すなれ、お八重は園井の食客にして曰はゞ親の許さぬ不義——自ら身を引くは不思議にもあらず、久松子爵の阿郞何事二三德なる句はお八重を孕ちしものにして淫奔多慾の婦人と云ふべく、此淫奔多慾の婦人を仔細らしく寫せばとて涙を催すを得べき。斯く云へば理屈に陷れども……「お八重」

の脚色は爲永なりとは余のごとき阿保者の眼にも知らる。爲永派の趣向は大抵義理に協はざる戀――寧ろ淫情を寫せしものにして今更に是を蹂踏するとは批評家にも似合ぬぞや忍月居士。

○著者が「妹と背鏡」を、世のシンデゼーに協はず、ト評されしが、「お八重」は果して世のシンデゼーに協ふべきや。世界は廣く人は多ければお八重の如き境界に遭遇する者もあるべけれど、千に二三の珍らしきを取るは小說の本意ならじ。お八重が清原より暇を取り故鄕へ歸り初めて伯父の死を知るとは餘りに馬鹿らしく、如何に疎縁に過せばとて伯父が死亡を親身の姪に知らせぬ事やある、よし知らずとしても他人の波之助に引取られをめ／＼と世話になるとは何事ぞ、末には自ら學校を立て日を送りし力あるに。著者は「妹と背鏡」のお雪を世のシンデゼーに協はずと評しコパルトを例證に出されしがサツトハ人情の微妙を御存じなしと見ゆ、此理屈から云へばお八重も仝樣にあるまじきや。又此理屈から生出せしものか、松葉新一の人情に疎きは笑ふべし。十三頁に「孝行をしたい時には親はなし」云々とある松葉が詞は草率に出しものなれども其哀情は察せらるゝに、親を思ふ心は何故妹を見忘れしや。百三十九頁に「ソレいつぞや迄君の内にゐたお八重ぼうと同じ名サ」、百四十頁に「さふ思へばどことやら幼な顏に見覺へがある」とあり‥是ほどに氣が附きながら如何に喜樂な人間とて別れて十年を經ざる中に現在骨肉を見忘れるとは。是れ計か波之助と新一は兄弟同樣の仲と思はるゝにお八重の身分を知らぬとは――新一の素姓を聞かぬとはサテモ迂濶、是等は果してシンデゼーに協ふや如何。

斯くはいふものゝ余はシンデゼーある獨逸語の意義を充分に知らず。唯忍月居士の批評文中に於て朧ろげに悟りたるなれば此半熟の詞を濫用するを止め、余――淺識なる余が管見を述て奇警なる批評家即ち秀拔なる此著作家の教を乞はん。余は考ふるに人情小說の妙は讀者をして主人公と同感の意を起さしむるにあり。如何にして仝感を起さしむべきか、他なし‥‥唯眞面目の筆を以て眞面目の事實を寫すのみ。苟に此臆測を標準として評せば「お八重」は大に褒む可らざるが如し。著者は何故に眞面目の筆を振はざるや、事實は眞面目にてあるものを。獨逸の文學は知らざれども、如何に進歩したりとてヨモ悲哀的の事實を諧謔の文字にて寫す法はあるまじ。種彥の筆は以て種彥の脚色を活動せしめたり、一九三馬あらば必

や破壞すべきに。「お八重」の著者は何故に讀者作者等の文字を濫に挿入して悲哀的の趣向を破りしや、何故に心中を心理的に寫して餘味を讀者の想像に任せざるや。爲永は元より馬琴京傳の小説にても文中に往々作者の文字あり、英國の小説にても時に Author なる言葉を見受くれど極めて僅少にして却て讀者の興を催す事多し、夫すら大抵は諧謔的に用ひし例にして未だ極悲極哀の場合に用ひて適合せしを見ず。レッシング或はシルレルに斯る結搆あるや知らねど——若し有りとせば獨逸の文學は斯の如きものとあきらむれど、余の如き純粹の日本小説讀者は必ず放腹絶倒すべしと思はる。獨逸文學を研究せし方々は果して首肯せらるゝや否や、次を見て其是非を判じ給へ。

君官曰く沼津の殿そッくりだぜ(五頁)
作者は此憐れむべき一滴云々(七頁)
讀者請ふ怜むを休めよ(二十五頁)
作者の耳朶に達するやうで云々(二十六頁)
讀者既に先刻よりお察しの通り云々(二十九頁)
殊に作者がお八重の亡母に代つて云々(三十一頁)
是れ即ち作者の筆の先に掛ッたる讀者のお眼を煩す云々(三十三頁)
業平の讀者諸君は云々(四十七頁)
作者は之に簡明なる定義を云々(四十八頁)
不粹の作者試みに云々(五十三頁)
だまれ野暮作者(同頁)
讀者の注意を要し又著者も云々(六十三頁)
著者には何の事だか分らず讀者にも云々(七十四頁)
讀者曰く大ヨ(八十頁)
作者にも解らないが云々(九十六頁)
作者も疑ひ讀者も訝かり玉ふならん(百十四頁)
讀者曰くどうだか(百二十五頁)
讀者のお目に掛つた後(百二十九頁)
野暮の忍月居士坑にすべし(百四十五頁)
著者の言葉ではない(同頁)
著者其責に任せず(同頁)
著者はこんな無關係の事を云々(百五十四頁)

斯の如く繁に過ぎ平均一回二三を繰返すに於ては目ざましき奇觀と云ふべし。獨り其奇觀を呈するのみか、彼は云々と其心裏の秘密を亮然と寫されたれば余の如き流讀者と雖ども少しも遺憾あるなし。唯八間の心ばかりか、八十頁に犬八十五頁に團扇の心までを描かれしは其用意も到れりと申すべし。眞率の文字に讀者の倦厭せん事を慮ばかりて滑稽諧謔を交へられし狡猾手段の恐ろしさ、三十一頁に「此節小説家のお定り文句ダヨ」百五頁に「袖あいお方とはこれより言ふとか」とある如き眞面目の余も殆んど臍の有處を失ひたり。喜三二よりも一九よりも優りて覺ふ著者が筆才。

文章は流麗富贍にして著者が博覽多識は卷頭にシルレル、白居易業平の句を引かれしにても知らる。五條歌合の判に「歌は必らずしも才學をふるひて繪師のゑの具をつくるつくもつかさの木のいろをさまく゛わりすへたるやうにはあらざるべし」とあり。歌と小説とはちがへど、學者の専有に屬する歌す

らも斯くなるに…。多識の忍月居士、白氏文集のみが文章にあらず、誰ありしか…白俗と罵りしは。小瑕瑾は更に云はず、褒むべき點多かればなり。褒むべき點は更に擧げず、世間の讀者是を知ればなり。唯悲しきは獨逸文學に暗き余が其隱微を發見し謀ずして「お八重」の著者を滿足せしめざる事を、敢へ玉へや…ヤヨ忍月居士。五月八日靜岡逆旅に認む。

論説

○佳人の狀況

木村熊二

人世の狀況を觀察すれば恰も走馬燈に駆る形の如く幾回となく喜怒哀樂企望落膽の塲に奔走し短き旅路を經過してはては幻の影だにとゞめずありにけり斯るはかなき世の中に生長て名利の奴とあらず喜怒哀樂の綱に苦められぬ人は自己か靈臺を冬月秋水の如く澄清して浮雲は之を遮るも明を失はず逆風は之を搖動すも又靜なり言語動作が尺寸を違す裕然として自得し超然として世表に出るあるべしされば縱令身はあだし野の露と消ゆるも芳名はいかでか千載の下に墜らざらんや其の人なしといへども其の風采は後人をして仰望せしむるに足るものあり如此衆多の人に秀たる所以を尋るにたゞに生涯の方針其の向け方宜を得ると否とにあるなり今や婦人教育の盛に流行する秋に當り夙に其の志向を定め勤苦忍耐して成就する時を待んとするもの少からずといへども其の間には或は方針を思ぬ方に向け心思を身躰の奴隷と爲して學問を爲すにも技藝を學ぶにも世上に富貴利達を得る階梯と爲さん事を企てゝ心に奮發興起の念なく身に高尚清潔の行なし一刻千金の價値ある有爲の時間も徒らに春と過ぎ秋と暮して顧ずはては潯陽江上に琵琶を抱きたる商家の婦の如く身のうきふしを歎き窮途に悲みて他人の榮花を羨めり夫れ人少壯の時は石に包れて其の圭角を顯したる金剛石の如し其の教育と薫陶の宜しきを得て其の清輝發すべしといへども自然天賦の美徳を失はず之を外部に發揚する事を勉めざる可からざる也試に朝日も匂ふ姿容の花にこぼるゝ露も色香あるまだうら若き乙女の狀況を擧て其の前途の幸不幸をば賢き姉妹に判斷を乞んと欲するなり。

梅の花飄零て後は閑窓の春に來てなのる鶯もなく梨花の雪の深ければ柴の扉をおとづる人の跡もたゆるなるべし伊よ簾は半捲きて殘る香篆の薫るもゆかし大和店の文書はさらなり馬

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

琴京傳春水の著書まで書架に陳列して淨かなる机により深き淺きは知ねとも硯の海にかざりつゝ人の情と世の態の濃きも淡きも墨の色にて千世まで匂へと書つらねたり愛と誠の姉妹に伴なひ詐僞奸惡なる少年に接着し人情の元素たる喜怒哀樂の眞味を嘗めたることもなき女史の身にして其の眞像を寫し出し其の象聲をつかひ世に高評を博せんと望むなるべし」。

晩櫻殘る化粧もいつしかさみだれに洗れて緑すゝしくなりにけりものうかる身はたれこめて春の行衛を知ぬなるべし四壁の琴筑に空閨夜ゝの夢醒めて歌吹海の昔を忍び橋頭賣卜の人に金錢を抛て身の行末を歎きたり雲なす髪は半偏りて玉の釵墮んとし涙によごす殘粧をはろふとすれば尙も思のます鏡向ふ氣力はなかりけり臂に約する金環は寬さ三寸物や思ふと人のとふまでに憔悴たり」。

芝海の浪は靜にして漁火相映し春月は朦朧として卯の花の上に眠る樂隊の曲罷んで舞踏は人將に散ぜんとす玉燈のみ爛然として光を放つて金殿は已に寂寞たり只看る兩箇の佳人は各紳士に伴れて端近く据たるソッハーに凭れり大姉は梅の如く淡白にして淸く阿妹は櫻の如く濃殺して艶なり淸と艶との間に紳士等は坐を占めたる時に大姉は接待口より贈り來るシャンペンのグラスをとりて杯中に映る薔薇の朱唇と接吻する樣に一口飮了して「舞蹈と筵會が此頃の樣に續きますと隨分疲れます」といひつゝダイヤモンドにて飾りたる少さき金の時計を一寸見たり紳士は遽然「オー、ロヴ、レメイン! イット イス ノット エット ユーヤル デー! イット ワズ ゼ ナイチンゲール エンド ノット ゼ ラーク,」夫より縷々にもつれたる言葉のあやもやゝとけて紳士等は歸館を促がされまだ因循するさまにて「明夕は」と眼と眼を見合たるは意中に盟ありと雖とも兩心の外は知を得すかくして靜隱に畵廊を出行けり」。

遠山の眉は靑黛を畵かずして美しく桃李の顏は春光自然に粧ふ廊下に響く時計の音を數へて「まだ九時もう一時間あゝうれしい」と新聞紙をかけたるランプの下に坐して結んで解やすき束髮を飾りたる一輪の白椿は落て散るも覺へす隣房の笑語も耳に入らす六ヶ敷課業も特に專心勉力によりて贏得べきものと決心したる樣にウェブスターの小字書を操返し何やらの書を讀みいたり」。

四方の隣は音たへて戶にもる月の影も露けし螢の如き一穗の靑燈に向ひて「文よむとても手習もならぬ此身の行末」はと思ひみだれてさすがに神にまかせしまこゝろもむすぼれ易きか

ら糸のたゝ一筋に編物細工細き乙女の世計と其の宿志をばあわれむ人もなかりけり」。

昔より佳人ハ薄命なるもの多しと其豈然らんや蓋容姿の美麗なる人は常に人の羨む所なれは自ら謙遜にして其の美にほこらず退て内部實有の才德を育ひ自ら恭敬する事を學び得ば何ぞ愁眉を顰めて薄命を歎ずる事あらんや婦人の性質は柔和にして物に觸れて傾き易すく他人の嚬笑によりて喜怒の念を動かす事又早し飲食衣服の慾を以て其の心思を苦め勢利を慕ひ諂諛を喜ぶ事は男子よりも亦甚し故に男子をして與し易きの感情を生ぜしめ終に其の術中に陷れて玩弄物と爲さんとするに至るなり西洋にて男女交際の淸潔と端正なるは婦人たるもの丶自ら虔潔を尊ひ心思を高尙にして貞正自ら守る所あるを以て男子をして犯へず之を恭敬せしむるに至るなり何ぞたゞ其の美麗を愛慕せしむるのみならんや古人云自ら恭敬する事は人の着る最貴き衣裳なり其心思を感移して高尙ならしむるもの也と婦人にして其の義務の重き事を感じ夙に志向を定め世間の毀譽に由て輕重を加へず自己を高尙の地に進めんと注意するものあれば縱令身は卑賤の地にあり窮苦無聊の際に立とも其の胸中に醞釀蓄養する所の仁愛喜樂平和溫柔遜節は自然衆人の仰望する所となりて遂に身を高尙に置く事は決して六ケ敷事にあらずと信ずるなり。

雜録

○賢夫人の感化力

三蔦生

賢き婦はその夫の冠冕なり辱をきたらする婦は夫をしてその骨に腐あるが如くならしむ。

智惠ある婦はその家をたて愚なる婦はおのれの手をもて之を毀つ。

妻を得るものは美物を得るなり。

誰か賢き女を見出すことを得んその價は眞珠よりも貴とし

その夫の心はかれを恃みその產業は乏しくならじ……

その夫はその地の長老とゝもに邑の門に座するによりて人に知らるゝなり。（以上ソロモンノ箴言ヨリ集ム）

米國上院の議員ハウストン君或時スピーカー、ウインスロップ氏の催にかゝる大宴會に招かれし事ありしが或人君に問ふて君は近頃嘗て君が好んで常に臨みたりし遊樂の場所へさらに行き玉はざるは何故ぞやと云ふ。

此時ハウストン君の答は人の妻たるもの若くは娘たるものゝ

深くその心に銘してをくべき價値ありと信ず。

時に君靜かに之に答て云けるは我敬愛する夫人若し我と偕にあらんに相伴ふて行くを好まざる所あらんには假令彼れ我と偕にあらざる時と雖ども我れは決して其所に行くまじと堅く心を定めたり今君が云はるゝ遊樂の場所の如きはクリスチヤンたる我が妻の我が爲めに痛く行くことを恐るゝ所なりされば我は我妻と相伴ふて行く能はざる所は如何なる遊樂の場所へも行くまじと堅く心を定めたりと。

其時同席にありし田舍の一議員傍より得意顔にて云出けるは余が夫妻の間はしからず夫婦相互に用捨する所ありそれらの事の如きは各々其好む所に從ふなりと。

ハウストン君再び之に答て云けるは然かりそは君に於ては左もあらんたゞ余は此一點に人と異なる所あり我が妻の如きは我が爲めに恩人と云ふべき者にして全く我が品行を造れる者なり我れ嘗て肉慾の奴隷として殆んどたちかへるべき望なきとき彼れは我をその沈淪の中より導き出して更新せしめたりかゝる次第のあるが故に彼れ吾れと偕に居らざるときと雖どもも若し彼れの心を少しにても痛むるものならんには我は之をなすこと能はざるなりと。

世に妻たるものゝ種類一ならず或は其夫を惑りて不義に陥らしむるものあり是れ妻の下位なるものなり或は其夫の命にたゞ從順にして婢妾の地位に安んずるものあり是れ妻の中位なる者なり或は其夫を助け導きて君子の途に歩ましむるものあり是れ妻の上位なる者なりハウストン夫人の如きは世に妻たるものゝ鏡とすべし。

○外題

怪快子

むづかしき者、外題。人知れず著作家の苦しむは外題なり。Spectator（觀察者）はアヂソンが腦漿を絞りし丈けありて公衆の眼を引きしが是を襲ひし Universal Spectator（宇宙の觀察者）は最早讀みる者なかりき。嘗て The Champion of Virtue（德の勝利者）なる小說を著はし購買者なかりしかば The Old English Baron（老英男爵）と改題して顧客を引きし事ありし。日本にても外題惡しき爲め賣れぬもの改題して往々聲譽を得る事多し。之より皮相の蕩案なれども是に依て著者の韵致を知るに足る。今其種を分ちて六類となし以て日本小說外題の嗜好を示すべし。

第一類。戲曲の外題に擬したるもの、馬琴稚彥を初め文化文政時代の小說には此類の外題多し。例へば雲絶間雨夜

Digitized by Google　　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

月(馬琴)花封莟玉章(二世種彦)緘手摺昔人佩(初代種彦)濡燕子栖傘(京傳)等の如し。此頃にては月雲兩面鏡(採菊)風琴調一節(美妙)等にしてや、廢れたる方。

第二類。傳記或は歴史染たる外題にして例へば里見八犬傳(馬琴)大内十杉傳(春水)お千代傳(風來)等の如し。近時にては竹間善文(學海)蝴蝶(美妙)お八重(忍月)の類にてや、西洋躰に近きもの。

第三類。詩歌より脱し或は其調あるもの、例へば石言遺響(馬琴)巫山之夢(一九)等にして當時にては雪中梅(鐵腸)行路難(南翠)眞行く月(美妙)の如し。褒へもせず又盛んならず。

第四類。比喩的のものにして日本西洋共に多し、頗る雅なるあり又大に俗なるあり。例へば玉子酒(其碩)錦の裏(京傳)八幡鐘(春水)等にして。近きものにては京人形(紅葉)川添柳(篁村)水と石(香雪)の類。又本朝醉菩提(京傳)やまと昭君(紅葉)新殺生石(篁村)等も此中に屬すべし。

第五類。編中の主人公又は事實を代表するもの。西鶴其碩は重に用ひしが馬琴時代には行はれず、西洋には最も多くして此頃芽出せしは西洋主義の盛んなる爲ならん。例へば一代男(西鶴)妾氣質(其碩)膝栗毛(一九)二筋道(谷峨)辰巳婦言(三馬)等の如く、近來にては細君(朧)色懺悔(紅葉)俠美人(學海)等なり。較盛んなる方。

第六類。源氏狭衣の跡を襲ふて極めて雅なるもの。例へば俊寛嶋物語(馬琴)繁々千話(京傳)曙双紙(京山)等にして當今にては無花果双紙(如電)もしや草紙(櫻痴)とりかへばや(採菊)の如し。

猶ほ仔細に考ふれば此外に出るもののあるべけれど大方は六種の何れにか屬すべし。朧氏の書生氣質は忽ちに氣質の流行を來し、東海散士の佳人之奇遇は見る〱佳人の濫用を生ぜり。何事も眞似の世の中なれば怪しむに足らざれど少しく考案を費せば斯く淺墓に陷らざるものを。今日文學者の外題を考ふるに春の屋主人は第五類を重んじ美妙齋主人は第三類を使用し紅葉山人は第四類を尊ぶが如し。竹の舍主人のは輕妙香雪山人のは嫻雅南翠外史のは奇警、各々其作と協ふものあり。ジューダ人は極はめて風流なる外題を愛し、神學書に胡桃園或は金林檎と題せしと聞きしが。是に反して日本にては滑稽の作に眞摯なる名を命ぜしことあり、例へば舊觀帖(咸和亭)、貧福論(一九)月下清談(森羅亭)等の如し。此頃の文學界

に顯はれたる外題にして最も斬新――寧ろ奇に走りたるもの三あり、即ち「イエスノー」（紅葉）わたしでも（妖怪子）ア、夢！（漣）是なり。却て面白からず。又西洋の小説を翻譯するに往々外題を變ずるものあれど可成は原名を存したし、唯變更するのみか時には原名の面白きを化するもの多し。此等は謹しみたき事、例へば、

アラビヤンナイト物語（原名）全世界一大奇書（譯名）
アリス物語（原名）花柳春話（譯名）
アイバンホー物語（原名）梅蕾餘薫（譯名）
モントクリスト（原名）西洋復讐奇譚（譯名）

此等は最も甚しきものにて俗客の眷顧を受くるが爲とは云ひながら今少し考のありさふなものなり。アイザックヂスレリー氏曰く、「書物の外題は見せ物の看板の如く大抵は中より立派なるものなり」ト。蕣花のきらびやかならんよりは燕子花の水にうつるが如くならんこそ望まし。

○國民之友第五十號に於ける
「文學と自然」を讀む、を讀讀す　一　の　よ

余が女學雜誌第百五十九號に於て陳述したるものは素と一時の感想のみ、敢て論辨の結構を組織したるものにあらず、然るに何の榮ぞ之を哲學宗匠に比さる、何如なる種類にてあれ讀み一種の宗匠として見らる、余は實に望外の幸ひを得たるもの哉。然るに若し實に哲學宗匠の識にてあらば、之を倒さんには一二彈指を須たず一吹嘘にて足れり一極めて容易の雜作にてあるべきを、醫學士森林太郎君は其の科學研究の多忙間に於て、彼か如き文學上の「大議論」を惠み賜われり、余が榮譽幸福此に至りて極まれりと云ふべし。依て謹んで之を讀むに、一讀去り讀來て呆然たるの外なし、余の胸中にも多少疑惑する所なきにあらねど、餘りの事に少しも之が爲めに抵觸せられず、何んとなれば、森氏が信ぜせらるゝ哲學と余が小哲學とは其の根底を異にし、森氏が解釋せらるゝ文字と余が所謂る觀念字とは其意義を異にすればなり。故に余は更めて余が信ずる所ろ解する所ろを記るし、尙ほ余が森氏と意見を異にせざるを得ざるの概略を記るし、以て先生の再教を請わんと欲す。

（甲）。所云る自然なるものを全くナツールに當しとするも宜し、抑そもナツールの自然なるものには「神韻」と稱し「粹」と稱するに足るべきの性質を含む可らずとする乎。之を含むを無しとする者は宇宙を一大器械視するの論者たり、之を含むを有りとするは天地に一個の意識發現せりとするの論者たり、此の辨見の是非先づ定まらずんば未だ「自然」の文字に付て容易すく爭ふ可らざる者あり。余の天地を見るを恰かも人間の顏ばせを見るが如し、啻に其耳目鼻口の形體を認むるのみにあらず、幷せて其の神相を認たむ、而して其の神相は一に心靈與性の陽に發現したるものなるが如く、天地に現わるゝ所ろの所云る粹、神韻、なるものは、實に是れ高天深地に瀰漫せる一大自在力の陽發せるものと考へ來れり。

氏は本草綱目とコスモスとを對したり、然れども本草綱目は僅かに一綱一目の調和を認めたるに過ぎず、コスモスに至ては殆んど天地の大調和を認め得たらずや、如此く支那の本草家より有神論者の進化論に至る迄、南畝に耕やすの賤農夫よりエールシヤイアの吟風夫に至る迄で、若し彌よ眼界を廣濶緻密にせば其の自然を洞觀するの美眼識亦彌よ高尙優麗となるべし。故に余が所云る自然には固より自然の精神を含めり、顏面の神相を顏面中の神相と云ひ、ヂーチュアにスピリットを認たむると云ひ、ナツールにガイストを認むると云ふと、是れ一派の哲學論者を除くの外固より余に贊成を表する所ろ也。但し必らずしも未だ神相を認ためずと云へども亦是れ顏面を見たるものなり、如此く未だ「精神」を認ためずして只外形の「自然」を見るもの固より多し、然れども此の一派の議論に據り

て悉く他人の用語を奪はんするは蓋し學者の事にあらず。

(乙)。「眞」と「善」と「美」とを區別するは固より可なり、智性に於ては窮極する所ろを眞とし、德性に於ては窮極する所ろを善とし、美性に於ては窮極する所ろを美とす、苟くも三性に區別あるを知らば亦た三者に於て相異なる所なくんばあらず。然れども此の三區別は恰かも天の三位を論じ人の三質を論するが如し、其の窮極する所ろに於ては皆な渾全同一躰にあらざる可らず。即はち完全したる「眞」は亦た「善」なり「美」たらざる可らず、完全したる「善」と「美」とは亦「眞」たらざる可らず。余は大完全したる大道理の全德たるを信じ、大圓滿したる大道德の全眞たるとを信ずると共に、凡ての極美の美なるものは決して不德に伴ふとを得可らずと確信せり。　美術批評の根據は趣味に歸するが如し、而して趣味は其地の舊習慣風によりて大に變化せらるゝが故に、不道德者の趣味は時として不道德の美術を美なりとすることあり、然れども是れ決して大眞、永明々の正趣味にあらず。抑りも之を不道德なりと判定するの德性は同時に嫌惡不快の感情を抽起せしめざるとあらず、然るに若し不道德なりと判定し得べきものを目撃して寧ろ之を美なりとすることを得るの美性あらば、此美性や必らず是れ正純の美質を得たる者にあらず。

(丙)。「眞」を認識するの元礎の意識に在るが如く、善を認識するの元礎の亦た信仰にあるが如く、「美」を悟るの元礎も亦た趣味に存り、要するに皆な直覺に過ぎず。而して意識の上に論理法を以て論派を結構する如く、信仰の上に德教論を以て道派を組織する如く、趣味の上に美學美觀を以て美術を製作するを固より之れあり。蓋し人間未だ完全せず、只だ萬物界に片々散々の美を認め得るとき、此の分散したる美元を綴合し、調和せしめて、以て一幅の畫一律の詩と爲す也、之を美術界の製作と云ふ、而して其茲、道德家の道德論を組織し、哲學家の學術論を結構するが如し、只だ其の製作、組織、結構の尤も自然に適したるもの即はち尤も美、尤も善、尤も眞となるなり。　故に余は美術文學に製作なしと云はず、只だ製造を可とせずと云ひしのみ、氏は余が製造に不同意せしを以て製造の反對なる摸倣を可とするならんと推せられぬ、氏が忖度も亦酷なりと云ふべし、所云る摸倣とはNachamung = Imitation の義か、如此き摸倣の不可なるとは既に定論あり、只だ余は彼の Schaffen = Creat を以て製造と譯するとに同意せざる者耳。然れども茲に確知すべきは、今の論派道派の決して完全ならざる如く、今の美術も亦決して完全ならざるとを認むるにあり、而して亦た論派道派に層々として優劣高下するものゝある如く、美術上の觀察にも亦た高下淺深あるとを悟了するにあるなり。　犬は櫻に吠ゆ、農夫は月に嘯ふく、而して詩人の吟咏は此時痛歎無限ならんとす、如此き差別は豈に天地に美の增減あるが爲ならんや、只だ之を直覺する者の美眼識の至ると至らざると、形骸の美にだに感ぜざると、形體の美に感じて未だ精神の美に感ぜざるとの差異あるに由るのみ。

(丁)。人は「自然」に依りて教導せらるゝもの也、其の動舟撰より、其の國家組織の政躰に至るまで、悉とく是れ自然の爲に教導せられたるにあらざるはなし。理學哲學は抑そも何如なる者ぞ、其の宇宙の現象により其の現象の調和によりて僅かに教示せられたるの解釋に過ぎず。彼の正否是非を判定するの論理法道義學と云へども、亦是れ天地萬物の爲に教導せられたる經驗解釋に過ぎず。古來驚天動地の大發明を爲したるものと云へども、窮局するに只是れ自然の指示、自然に對するの直覺に據らざるはあらず。然るを獨り何に由て文學美術のみ人間の驕慢自負を以て成立つを得べしとする乎。　太古、人はヱデンの花園に在り、智慧の木の實を食ひてより則はち瞞然として墜落したり、嗚呼哲學者も已が儘にさまよひし后ち再たび歸り來れり、道德家も己が儘に旅せし后ち再たび歸り來れり、今の文學美術よ汝ち好き程にして謙遜と爲れ、天下何の處にか「自然」に優るの大教師大理想あらんや。

森氏の高論を謹讀して端なく以上の愚見を吐露したり、若し「文學と自然」との前論に拙劣を極むるものあらば、先づ此根底の愚見の謬れるに因るなり、故に森氏にして若此の愚見の不可なるとを教示せば余は喜んで之を受ん。　蓋し自然を卒するの徒は、尤も正當なる自然を信ぜんとするの外か、他に據る所あらざれば也、敢待。

(畧辨)。文學の「大」性に付ての細かなる高論は暫らく題外として築んと欲す、何となれば必ずしも「最大」と「極美」とを對照せしにあらず、たゞ民友子と局外生とに幷せ答へたるに因れば也○自然の儘に自然を寫すは科學のみと云ふ乎、若し自然を以て天地萬物の正當なる現象形勢なりとせば、此自然を寫すものは必ずしも科學のみにあらず○想と物との關係の說先づ夫にて不都合なし、而して此の論は余が愚見に何の關係もなし○余が趣味に據れば弁破崙、豐太閤、阿輕、メデア等の處置は純高にあらず、其の腐行中に混淆する砂泥中の金分のみ僅かに光るなり、故に或る限り迄では美なり、未だ極美にあらず○醜なる者が美なりと云へる

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

道理あらず。凡そ人間若し完全せば、塊然たる土石も遂に美なりと感ぜらるべしと雖ども、今に於ては只だ其の中に存する幾分の美を感悟するに過ぎず、故に彼の醜婦を、畫いて美とし、吟じて美とならしむるものは、只是れ其の醜とせしものゝ中に隠れたる美を發見せしに過ぎず。故に阿累を美とするものは之を詩に於て只だ美とするにあらず蓋し本人を見るも亦た之を美とするとあらん。理學者は土灰を化して黄金とす、哲學者は凡事を化して眞理とす、宗教家は無味を化して榮光とす、如此く美術者は凡俗の醜とし不美とするものを化して美となす也、然れども化するとは化作するにあらず、たゞ發現せしめたるなるのみ○ゾーラは賤卑なる自然を寫して高正の自然を寫すとを得ず、然れども之を單一の美術としては彼が才力の巧妙に感ぜずんばあらず、余は只だ之を國家經綸の上よりして、只だ之を極美論の上よりして貶斥するのみ○最美の美文學は概ね自然の儘に自然を寫さずと云ふ乎、然らば何に據りて寫すぞ、人の理想は自然より來り若くは自然の爲に發達せしめらる、人の趣向は自然に倣らひ若くは自然より啟示せらる、自然に據らざるの製作者は夫れ只だ驕慢なる文學美術者なる哉、美術は手を離れて存の如くに脊を成すなり、石を鑿て羊の如くに羊となす也、一言するに自然の儘に自然を寫す。

○離別

湖處子

余が親愛の友なる一人の乙女は、米國に行かんとて、二週間の用意の後、今日其の凡てを了へたり、今は唯明日といふ日より、其身の恐るべき天氣の慈悲と、行途の安危等の取越苦勞と、其身の世界なるも、其國、其家、其友を棄てゝ、聞きたるのみの世界に旅立つべき、二度目の決心を爲すのみなりき。

日の夕より其家族は、爲すべき事なきに心急き、彼女が善きクリスチアンなりし程、多く得たる其友は、前より後に其家に集へり、初の間互の話は、浮きたる祝儀のみなりしが、心は次第に言葉に制がれて、漸く情緒の底に下れり、疾より縮み濕みし口は、漸く一人二人づゝ默まりて、唯折々の歎息に、神を呼べるの思を視せしが、各自の心は遂に祈禱會に急ぎしなり、斯くて慰籍の聖語は讀まれ、離別の讃美歌は歌はれ、去に往くる身と殘るとは福なるの勸告は爲されて、各自の祈禱は一樣に、「主よ彼女を憐み玉へ」にありしなり、施餓鬼の烟も天に達すと、況して清き愛、誠の心の祈をや、主は今聽き玉へり、彼等の悲は涙の後に去りて、今は彼女を神の大手に、任せたるの思を以て喜びあへり、尚ほ、讃み歌ひ爲、勸告め祈り爲、世の離別の死人を弔ふ如きにあらで、誕生を祝する如くして、深更に及びて歸れり。

彼女に嘗ならぬ一夜も、每夜の如く短かくて、今日は昨日の明日と明けたり、今は春過きて夏來り、花落ちて葉のみ繁り、陽氣に歌ふ鶯往きて、馬琴が傳へし、「八千八聲杜鵑、我も血を吐く血の涙」なる陰氣の聲の聞かれ爲、宛も我邦に於ける離別の時節なりき、雨も亦朝より降りて午後の一時に至れり、或る牧師は新橋の坐より、或る美術家は彫刻の室より、二人の記者は默思を棄てゝ、妻は一時夫婦の愛を割きて、兩性の學生は、半日の許可を得て、一同に新橋の停車場に集ひ、三十分の後に、別れては五六年も相見ざるべき其友をうち護り爲、或は天氣時候に就て、或は航海の苦難に就て、主の誘導、船中の慰籍に就て、詩人の如き思想を語れり、唯彼女の家に寄寓して、其が最も愛して最も愛せられたる、年少き道の友なる乙女のみ、淋しき顔に默然たりき。

頓て汽車に乘る時來にければ、濱まで送るものは彼女と乘り、左なきものは其室の側に彼女と語れり、後れ來れる友は來り得ざる友の手紙を齎らし、其の顔も文字も、彼女の見には大きく見へたり、汽車の第一の聲の吹に、各自の談話は途切れたり、言葉に上り殘れる、上り得ざる凡ての思の、胸一杯に膨れしは、此の沈默の際なりき、昨夜の慰籍は再び新たなる慰籍となりて、聖書の語、天父への叫、離別の歌は、凡て聲なく流れしなり、洋行をする氣丈の心にも、猶ほ藏め得ざる寂の涙はありて、其は女の弱に返りしならで、眞に離別の悲なりき、見れば窓邊に佇める彼女の乙女は、疾くより手巾にて顔を掩ひたり、再度の吹に、各自の重き情よりの「然らば」は、一口よりの言の如く、彼女の胸に鋭く響きぬ、車輪は動き、汽車は往きたり、長家となり、梯子となり、卓子となり、百足となり、線となりて影なくなる迄往きたり、唯其の烟のみは、彼女の心の如くヨリヨリ回れり。

常に誇ふクリスチヤンもイザとなれば悲まざる能はず、唯「哀む者は福なり、其人は慰籍を得べければなり」との最高處よりの聲を聞きて、天の父に感謝するなり、此時に、彼女の家族は一人も見へざりき、重ねて涙もて其女の心を濕らさしとの故ならん、嗚呼彼等は福なり、淑き新婦を嫁するが如く、其愛女を主に献げたればなり、彼等の親心は、季節每に其女を思ひ煩ふべきも、其屆かざる小さき愛は、

主の手によりて篤く愍まるべければなり。

然れ共彼女は今一度、最期の離別を受けざる可からず、其は裕の友との離別にあらで、本國よりの離別にぞある、三日五日の海上に見るべき世界は、皆首府より地脈續きの日本國なるも、前に控ゆる大海の、漸く漸く擴まる間に、後ろの陸は朧ろになり低うなり、彼の上微に出でゝ、木屑の如き山の項、其を僅ぼ本國の名殘とて、眺めし影の今にも落ちて、其處に低迷へる雲だに隱れ、唯際涯なき空さ波との平行したる、爲頃の圓滿界に入る時に、彼女の悲みさ惱の程は如何ぞや、然れ共彼女の心は暫時にして安きを得ん、蓋は別れし友の密室の祈禱は、何時も「神は彼女を憐み玉へ」にあるべければ、去れば彼女も亦、其常に好み歌へる讃美歌を、其の廣き廣き大海の面、心細き甲板の上に淸き聲にて斯こう歌ひて悦ばん

いつくしみふかき　主の手にひかれて、
この世のたびぢを　あゆむぞうれしき。

初まりく

○あぶなや地獄の釜

うき世を五百八十年と思ひて後世ねがふとのきらひなる親仁ありしに、其の息子は若いなりして信心深き者なり、常におやぢの佛ぎらひを氣の毒がり盆の十六日の朝いふやうはおにおやぢさま常には後生願はずとも今日は地獄の釜のふたさへ明く日じやと申すほどに、ちと寺へおまいりなされいといへば、さてくおのれは親に不孝なやつかな、地獄の釜のふたのあく時寺へ參らせて釜の中へふみかぶらせやうと云ふとかとて腹を立てた。

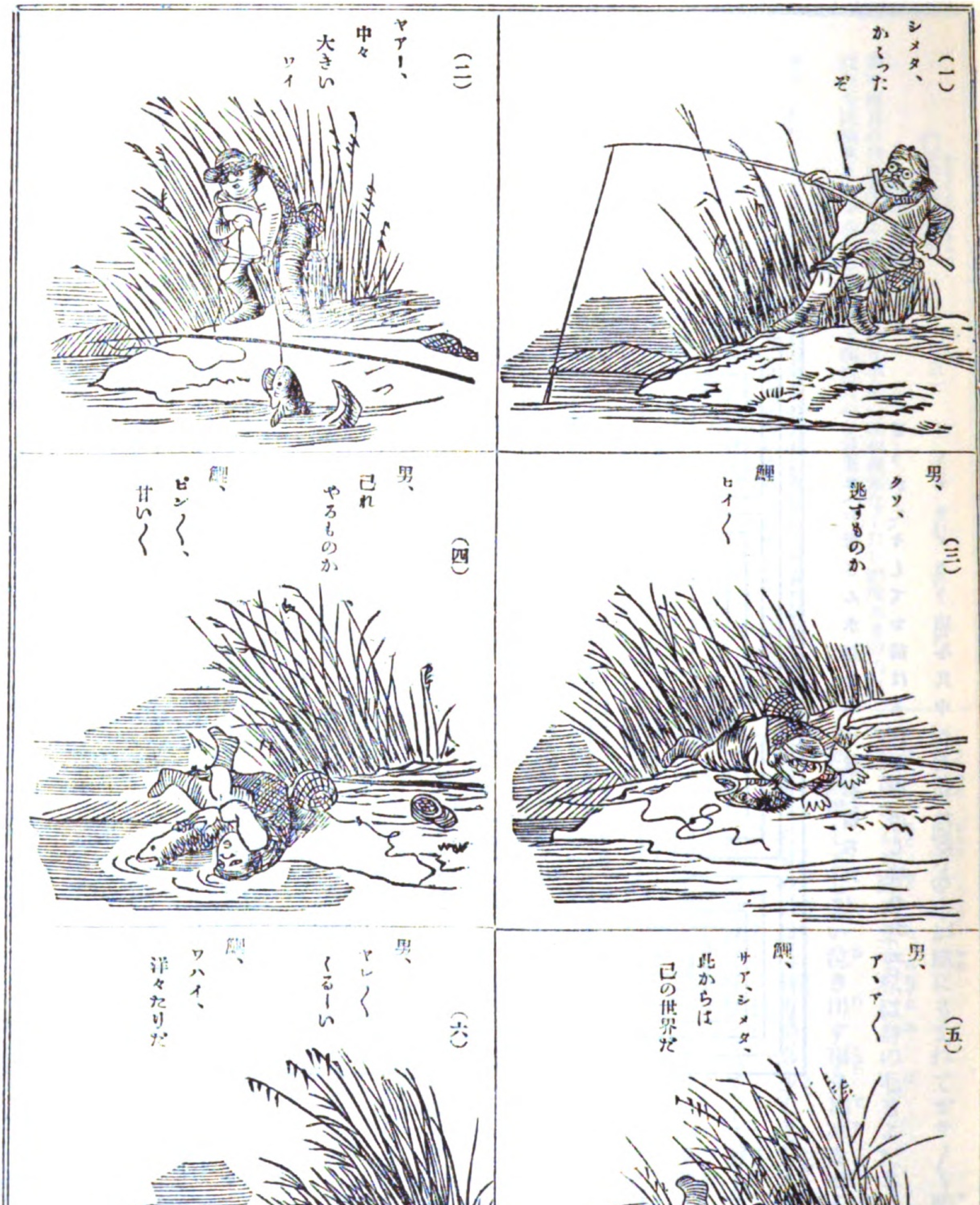
○隱したるは現われる

寺町の左る住持忍びく魚鳥をものせられしか、或時小僧に云ひつけて徳利を持たせ酒を取りにやる躰にてどぢやうを買にやりしが、小僧歸るさに門前に子供あまたかかりてあな市して居たるを小僧立よりて見ければ子供云ふやう小僧その徳利のは何んジヤぞと問へば、小僧、さ此の中に有るものを何じやと言ひ當たらば一疋やらう。

○つかぬ誹諧

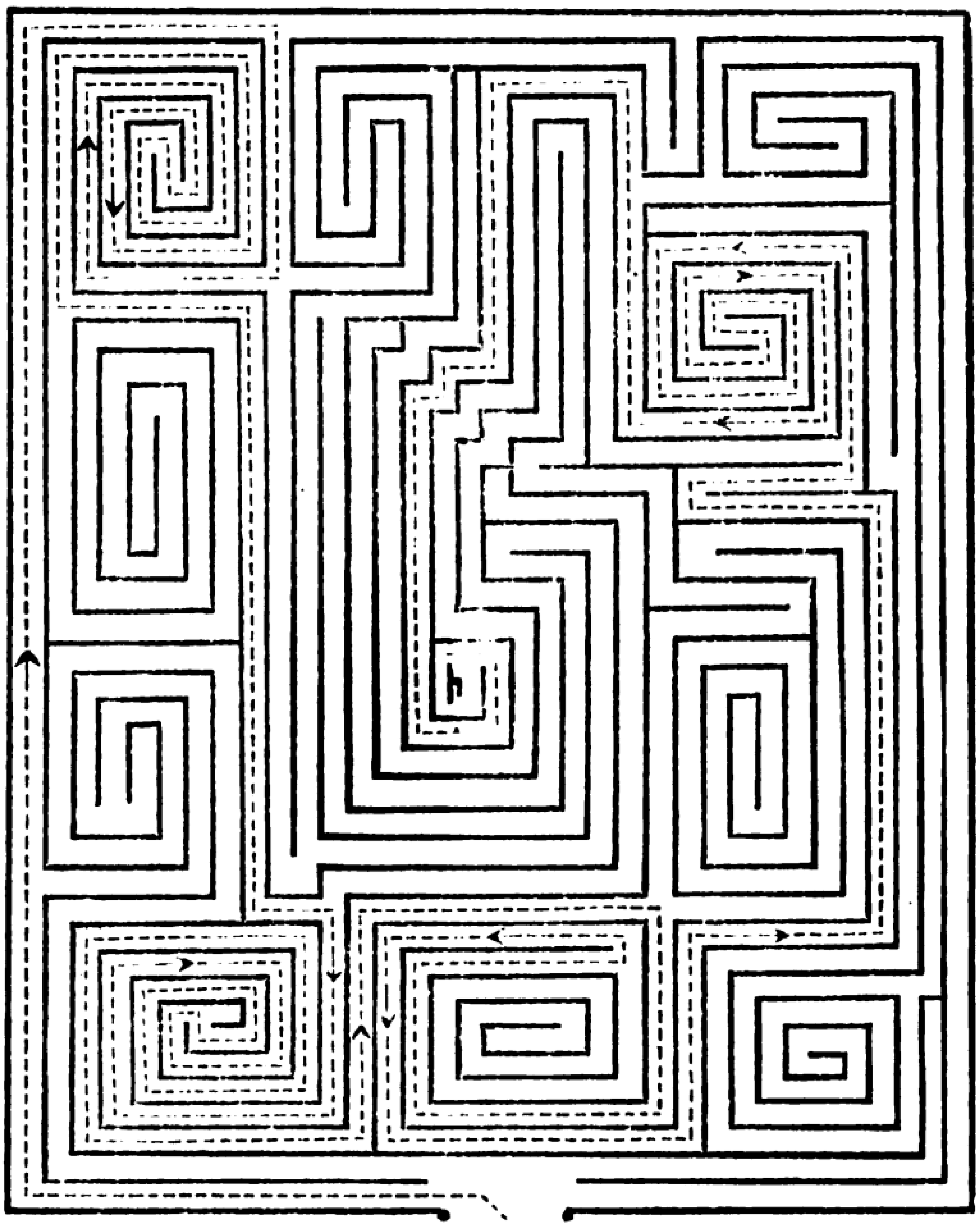
誹諧の流行る御時世、さる人百韻を興行してより合しに其中に此頃誹諧を仕習ふずんと初心なる機本といふもの人並み座敷に列ありけるに、發句より段々とまわり來て朝はらの草にこそいれ月影は　と云ふ前句、機本が手前に廻りたり、色々と案ずれども出ず、ひまはとる、やうくに善治がもちをかふてくふなりと付ければ一座の人々之は特の外違ふて付かぬほどに、よく付なをし玉へと云ふ、其時機本、されば其つかぬに由て餅をかふてたべまするといふ心じや、つけば買ふては食はぬ、各々の聞やうが惡るいと云ふものだ。

天下未だ定らざれば則ち專ぱら其才を取りて其行を考えず戡亂既に平げば則ち才行兼ね備るに非ずんば用う可らざる也。　魏徴


(一)
シメタ、
かゝつた
ぞ
(二)
ヤアー、
中々
大きい
ワイ
(三)
男、
クソ、
逃すものか
鯉
ヒイ〱
(四)
男、
己れ
やるものか
鯉、
ピン〱、
甘い〱
(五)
男、
アヽア〱
鯉、
サア、シメタ、
此からは
己の世界だ
(六)
男、
ヤレ〱
くるーい
鯉、
ワハイ、
洋々たりだ

○前々號考へ物の答

(上略)前號女學雜誌の末に一つのプロブレム御記載相成候小生は元來斯の如き者を見る時は解せずして止む能わざるの病氣御座候即はち小生は門を入りて達するもの〻一人に御座候云々　元良勇二郎



アノ子、お母さん水瓶の中へ鼠が落ちたノ。
さうかえ、そしてお前はそれを取出したのかエ。
イ丶エサ、ダカラ猫を其中へ入れたのよ。

○玉堂隨筆　(三)　南石外史

源平の相違

源平兩氏の經歷を考ふるに自ら異れり平氏に頼義義家なくたゞ忠度あり源氏には自ら武風ありて平氏には依然たる藤原氏の遺風あり。

源家政事家

源平の際たゞ一人の政事家あり曰く賴朝これ也早く鎌倉に居を構へ諸弟を奔走せしめて平氏を倒し速りに温言を吐て京人の志を收め又奥州へ上て泰衡を平ぐるや實俊實昌を召して州事を聞き國法を一切秀衡の舊によらしめ或は大江廣元の策を取て守護地頭を置き或は議奏官を置く純然たる今日の政事家なり。

戰國の三傑

家康は劉備の如く秀吉は魏曹の如く氏政は孫權に似たり家康の收る所となる勢止み難き所なり。

進化論一考

スチルリングはバックルが事々に進化論を採用するを笑ひ云ふ古代戰爭の時勇者先に進み尤多く死すべし優必ずしも存せずして劣者反て生存するにあらずやと然れども此時すゝむ所の勇者を殺すものは更に優等なるものにあらずや。

學者の登情

學者は常に輕氣球に乘じて下天を瞰視するの登情あるを要す世の治亂、家の興廢、業の難易、人の逆順、一切皆が研究の項目にあらざるはなし但だ之を見る當さに上天より臨視するの思あるべし敢て地上に降りて之に直接するの感を懷く勿れ。

日曜日終始

世俗の人は日曜日を以て一週の終日と做し信徒は之を一週の初日と做す。

＊～～～～～～～～～～～～～～～＊

兒藍

○子供の旅路　友鶴軒

私は或夜十二時頃にフト目を開て見ますと家の中に昨夕迄は誰かに寢て居ましたのが何時の間にか恐ろしひ荒れ果てた野原の内に唯だ一人置かれ凄い風がボツリ〳〵と大粒の雨を顔に打付て四方の草が風にもまれてガサ〳〵鳴るのと遠くに狼の吠ゆる音も聞ゑます私は身の毛もよだちドーシタラよからうと動驚してしまい泣き出す事も出來ません何處へ行たら人が居ようか家の方向は何方やら少しも分りませんまかし雨はだん〳〵強く降て來ます風もます〳〵烈しくなり狼の聲も耳近く聞えて來ます、私は堪りませんから急に逃げ出さうとしますそのうちに右の方より小馬程の瘦せこけた二匹の狼が暗に輝く兩眼を見開き私の方へ近付て來ます大變だ〳〵と口の内で叫びながら一生懸命に逃げましたすると狼も後の方より飛で來る樣子デス、私はその時もういけないイクラ逃げても仕方がないをとつ樣や御母樣の御顏を見ずに此處で死ぬノダと思と悲しくなりワット泣き出しますとコレ〳〵何を泣くのだと背を叩く人がありますフト袖の下から見ますと五十計の御老翁さんデス、御前は此の荒れ野を何處だと思ひナサル此處は怠惰者と我儘者の來る所で懲めの原と云ふ所ダ御前の家へ歸らふと思ふにはこれからなか〳〵恐しいこわい所を通らねばならぬが私の持て居る此の杖を上るによつて何でも此杖の敎ゆる通りにしなさい決して此の杖をおろそかにしなさるな早く行かないと先刻の狼が來るによつてこれから右の方を

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

眞直に横目もふらず走りなされと思だちて敎えて與れました私はその人の名を聞く事も忘れました何でも杖を大事にしてとシッカリ握てかけ出しました後を見ますと大層よく日が照てさつき歩て來た道の樣でありません私は立止りまして猿も居ず風もなくハテ宜景色だ後へ歸らうかしらんと前の方を見ますと眞暗で風の音はなほ烈しひようです私はいよ〳〵後へ歸り度ありマシタすると例の老人が與れた杖は私を前の方へ〳〵と引ぱります私は手に持た杖を見ますと正直と書てありますしかし正直の杖が敎えます事は何となく不安心デス、ケレドモ老人の言葉もあり疲れた足をふみしめて暗い中難澁の道雨風の烈しひ方え進まぬながら出掛ました、すると益々暗くなり一寸先も見えませんから私は少しためらつて居ります杖はます〳〵私を引き行くにモー堪らぬと杖を手ばなしますと悲しや私は傍にある一つの穴へ落ちました。

この話しはある小說にあるのを少し作かえたので今一回で終りますうの時何の譯かな御話しましよう。

前號に太陽系地球よりの距離日本に直して九千七百云々とかきましたは誤りで實は三千七百六十萬九千二百五十九里余ですうのあやまりを謝します。

お梅や、此間叔父さんが下すつたヘヤピンは純金だつて五圓するさう仰しやつたネー、でも今日銀座の店では同じなのに五十錢さ札が着いて居たよ、アラマー、叔父さんは夫だから感心ですツ、切度あれは縁日で買つて來たのですよ。

史傳

○敎育大家ペスタロッチ　かすみ

ジョン、ヘンリー、ペスタロッチは瑞西の改革敎育家なり、西歷一千七百四十六年に生れ、同一千八百二十七年に死す、享年八十二、之が一生の事業は人類敎育の大根底を定めたるにあり。

氏は幼にして父を失ない母の溫愛に依りて養はる、母は是れ非常の賢夫人にて居ませしかば、其の優渥ある信切は只だ氏が善性を發達せしと多く、氏をして嚴冷酷强に似たるの氣質を得させたると毫末もあらざりし。故に氏は稟質甚はだ愛に富み、人の難を見れば水火をも厭はざるの情あり、嘗て貧苦して友人の許に金を借りたるに、途中牝牛を失ないて悲歎する一農夫に合ひ、同情の念禁じがたく、直ちに借りたる金を悉とく與へ、禮謝せらるゝとあからんとて其儘に逃げ出したりと云へり。　年少の頃より氣質常に如此くなりしかば、尋常の職業に就きては常に失敗したり、遂に子弟を敎育するに至りて初めて「魚の水を得たりし如く」、氏が天命の天職此に於て見出されぬ、氏は此に於てか人世を大益したり。

最初は貧人の爲に職業學校を設けたり、然るに五年にして校

を閉ぢざる可らざるの事情出來し、大ひなる借金のみを殘して獨り苦しみたり、然れども敢て失望せず常に云ひけらく、熱信熱愛の基督信徒は其の所有する財産を神より與へられたるにあらず、只だ托せられしなり、即ち之を他の幸福の爲に用ひよとて委托せられしなり。

之より後ち數年專ぱら著作に從事して漸く生計したるが、三十才にして再たび實地教育に反へり、スタンズの郡に一茅屋を備へ、僅かに一人の家僕を置きて書生八十人を教育したり、此時八十人の手は悉とく氏が手にて握られ、八十人の目は悉とく氏が目にて見られ、八十人の涙は悉とく氏が涙に流され、八十人の笑顔は悉とく氏が笑らひに笑みたり、其食物も其飲物も皆な同一にて、氏は別に一友なく一僕なく一家具なく何をも持つとなし、只だ悉とく萬物を八十人と共にしたり、即はち彼等が間だに眠り、彼等が最後に眠に就き、彼等が最先に起き出で、彼等と共に祈り、彼等が眠る前に說教したり。

氏の傳を記せるものゝ云く、此時氏が書齋には別に所有する一卷の書物なく、其の器具は皆な書生と共用したり、氏は書生人々の性質に注意して深く其天才を發達せしめんとに盡力し、數字の代りに數を教へ、文字の代りに意味を教へ、冷たき信仰箇條の代りに生ける信仰と愛とを教へ、影の代りに實物を教へ、符徴の代りに實在を教へたり。

此後ち氏が學校の所在地には變化ありしが、氏が教育上の精神に至りては終始一徹して常に如此くなりき、特に六十才の比よりエベルダンにて開たる學校の如きは氏が設たる校中の尤も成功したるものにてありし。王も哲學者も慈善家も總ての教育家も皆此に來り、氏が教育の方法と精神とを見て大に學たり、之よりして歐洲全躰の教育に一大變革を起したり。

後に氏が高弟と爲りけるラムサウルなる人の記錄に云く、余は他の書生に劣るなき正當の教科を習たるものなり、左れど此の一事は實は左程の効能にもあらず、但だペスタロッチ先生の熱心、執着ある愛、之に由りて全く自忘せらるゝの躰、及び嚴肅謙遜なる心に至りては、子供をすら深く感動せしめたるが、余にも亦た極めて深き感じを與へ、之が爲に永久、先生に對して余が幼な子の如き感謝に滿つる如き情愛をば呈するに至りしと。

又當時或人がエベルダン校の實况を記したる文に云く、ペスタロッチ氏は既に年老ひ半ば墳墓の内に埋もれんとせらるゝなるに、氏に接する總べての人に斷えず吹掛らるゝ倘ほ其幼

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

な兒の如き心情、誠なるの愛は、多くの教師と生徒とを愛合して一躰と爲したり、生徒は學校の外に家あるとを忘れ、教師は此校の外に世界あるとを忘れ、一人の自利の念を起し他に越えて愛せられんと望むものもあらざりし、諸教師諸生徒は全く合躰したるなり、彼等は同じき部屋に眠り、同じき仕事と勞力とを分ち、万事同一に暮し、教師は生徒の助けと注意とを受けて彌よ信切に教へたり、と。

ペスタロッチは當時自らの日記に記して曰く、此校を始めし比ろは困難實に莫大なりき、輿論は全く余に反對し、數千の人は余が事業を恰かも庸醫の仕事の如くに見做し、自ら得意とする諸學者は全然余の教育法を無効としたり、又或る人は之を器械的の教授なりと笑ひ、或る人は記臆諳誦の法に欠けたりと誹り、又或る人は宗教に薄しと難じ、又或る人は徒らに改革を爲さんとすと歎かれたり、然るに余は神に謝す凡べて此等の反對は皆全く打勝れたり、余が校の子供等は喜こびと幸福とにて滿ち、其の罪なき氣質は傷つけられず、其の宗教の感念は養成せられ、其の腦力は教練せられ、其の智識は增加せられ、其の心は德に於ける愛を以て吹込まれ、全校にホームの如き一致の大精神浸入し、純粹なる父の如き兄弟の如き氣質惣てを支配し、子供は自由に感じ、其の活潑は職務によりて彌よ勵まされ、其愛情と信用とは彼等が心を高くし導きたり云々と。

氏は斯る成効を爲せし中にも、絕て滿足自得して驕るとなく、更に人を動かすの質素と淡泊とにて自ら供へたり、或時貧しき若き男氏に面會せんとて遠方より來しが、旅中にて金を悉とく費やし、エベルダンに着せし比ろは旅宿に宿るべき料もあらざりし、左れば氏は之を巳が家に宿さんと思ひつゝも家内の人々を難ますは氣の毒なりとて、彼の貧少年を其儘巳が臥床に眠らせたり。翌朝助教等は氏に用事ありて來り見るに知らざる青年宿したり、然らば先生は何處にやとさがし求めたるに、思はざりき之を教場の硬き腰掛の上に熟睡して見出しけるとぞ。

一千八百十五年、氏が七十の時令夫人卒去す、夫人は五十年間惣べての艱難のうちに氏を助けたる賢妻なり。氏は送葬の式場に於て述べて云く、

吾々は萬人に棄てられ卑まれたり、疾病と貧乏とは吾々を屈伏せしめたり、吾々は日々淚を以て硬き麪包を食たり、然るに斯る苦き試惑の時に於て、君が余に與たる忍耐すべき

力と、失望せざるの望みとは、抑も幾千ありしぞ。
而して死者の胸に聖書を置いて云く、
之よりして、君と余とは、勇氣、氣力、平和を得たり。

嗚呼古來人を敎育せし人擧げて數ふ可らず、然れどもペスタロッヂの如きは殆んど稀れなり。大凡そ人間を敎育するものは、先人間を尊とむの念なかる可らず、先づ之を尊とみ、深く一人の靈魂を重んじ、此の一箇魂の爲には、天に於てハ上帝幾千か憂ひ、天使幾千か泣き、キリスト幾千か苦しみ玉ひしと確認し、其の密みたる至重の實性を發達するは、啻に天を喜ばするのみならず、實に天の榮光を大に現はすものなりと確認せざる可らず、如此なれば眞誠なる愛も飾るとなくして起り來り、子弟に親しむの情も自づからにして渥深となり、滿校自由に和樂に嚴肅にありて而して敎師も子弟も皆な共に和ひ進歩すべし。　彼の黃金時代を古しへにありとし、弟子を師に優らざるものとし、只だ摸倣を骨髓とし、嚴酷を規則とし、校に鈴鳴り、叱音響き、鞭聲肅々たるに至りて、初めて規律ありと云はゞ、如此き敎育はたゞ一種の人を器械にて製造するに過ぎず。

今の日本の敎育は何如ん、此に一つの學校ありとせよ、而して其校に果して敎員の愛何如斗りに行はれ、又其愛なるもの、何如斗りに覺られ、彼の自動自活したる書生の如何斗りに樂しみて能く勉學するある乎、吾々もし其の多少を計り知らば、今の我國に於てペスタロッヂ一流の敎師の極めて尠なきとを知るべし。而してペスタロッヂをして勇ならしめ、愛ならしめ、忍耐ならしめたるものは果して何者ぞや、大凡そ人を敎ゆるものは先づ此の終極物に深く考へ到らざる可らず。

小説

いわるのん物語（其二）

あめりえ　らいぞす著　美妙齋　たより合譯

いつそ戀しい人に災をも掛けず、極おだやかにあることなら私が死んでもとも思ひ込みました。これを思ひつゞければ無くなつた私の母親の事も胸に浮かず、直にまたそれがおせなすにも變るばかり、憶はず涙をもよほしました。

また眠る前におせなすに逢ひたくもなつて、更に起ち上ッて町へ出掛け、徒歩に歩き出しました。

いつか身はおせなすの家の前に來て、そして一寸推せば門は半ば開きました。

心の中の妄想「あッ、庭に居る」。　こればかり、目をあげてよく見ました。

朝の時と同じくあせなすは身に純白の衣服を着けて、そして束ねぬ髮は垂れておのづから輝いて居ます。　右左へそろそろと歩いて居ますが、しかしその日は只わが身の足に注いで、頭は胸の上に傾いて、そして兩手は前に束ねて居ました。

庭には長の高い百合もある、それが月に映つた樣ハ丁度銀鈴を竿に掛けたやうで、また其外に名も知れぬ美くしい草や又薔薇や、また蒼空に黒ずんだシダもありました。　が、月下でもあせなすの唇ばかり紅く、宛然日に咽んで居る花の風情が見えるやうです。

あせなすの美を貪りたさ、話しをする前にまづその姿を見て樂しまふとて木を小楯に取りました、丁度生醉が飲んでも飲んでも飽かないやうに。

空には月も冴亘つて、そして見て居ると、あせなすは不意に足を駐め、片手を月に翳して、そして片手で百合の黒幹を後ろへ推し遣ッて居ました。

たちまちに見れば中天に些しの白雲が湧きましたが、見て居る内にそれが次第々々に大きくなりましたがいつか赫く服を着けた巨人の形になりました。　これは目の迷と思ッて目を拭ひましたが、やはり人は人で、而も鳥のやうに翔り下りました、翼は無くても、そして尤も白ひ衣服を着け、翼を風に吹靡かせて來ました。

顏は極めて美くしく、髮は額の上に燃える火のやうで、銀の鎧と靴とを穿ッて居て、地上には無ささうに思ハれるばかりの花を持ッて——百合、薔薇、及び日光蘭——その花も全く白、そして言ひ盡くされぬ芳香がして。

終に衣服は地に着きました——足だけは着かずに。

そして、あら、あせなすは同時に地へ伏しました。

立ち寄る天の人、處女を抱起しました。

「少女、恐れるな、恐くはない。　神の子のあざちるとはわが事、天上から汝の美くしさを見て、妻に爲たくなッて下ッて來た。　で、汝がわが妻となる固めとして髮の毛で束ねさせるためこのとほり天宮の神前に咲く花を持ッて來た」。

聞く私は舌も動かず、あせなすが承知するかと恐れて、ろの故は今までに神の子がこのやうな事をした事が有りましたから、度々。　が、私は聲を潜めて居ました。

「まア、私しを」、あせなすが答へました、「誰とおぼし

召します。」

「おせなすさ」、笑を含みました、「美くしいのさ。此の花を束ね、また神の子に近づく徳は行る」。言つて傍へ寄り、はやおせなすの髮の毛で束ねやうとしました。

が、おせなすは身を引いて髮をさめました。けれど苦痛の人が天を仰ぐやうに上をば向けません、敵が天から來たのですから、たゞ助けを求めて四邊を見回しながら、

「それはあんまり打付な御言葉、わたくしは困ります」。

「なぜ、永年の友とならうといふのに」。

ふたゝび傍へ寄りましたが、ふたゝびおせなすは身を避けました。で身は百合の生茂つた中へ埋められましたが、首だけ上へ出て居るさま、さながら、銀に包まれたやうで、その美くしさ！ 今はわざぢるもほと〳〵惚々と見て居る躰、たとひ神の子にしろ、私しはその目でも瞬つてやりたいやうです。

「なぜわが言ふ事を聞かぬか。天上界のもの、情は人界のより濃いものだのに。」わざぢるは言ひました。

もはや私もこらへ切れなく爲つて、その前に躍り出しました。そして高聲に、「私しの外この處女にはたとひ神の子だらうが何だらうが手はつけさせない」。

「無禮ぢやないか、その言葉は」。嵐の後ほどに落付いて。

「かまはない。僞では無い」。

よつてわざぢるはおせなすの方を向きました。

「御前この人知つて居るか」。

問れておせなすは目をあげて私を見、「はイ極愛して」と言ひましたが、實に嬉しくて、聞く私は殆ど死にさうでした。

「神が」、わざぢるはまた私を見て、「御前の無禮を罰するが知らないか」。

「何も知りません、たゞわれ〳〵二人は相愛して居るといふ外は」。

またわざぢるは處女に向ひ、「擇んで愛して居るなら仕方が無い、長く愛を保つがいゝ。が、この人の愛はわが愛よりは薄いぞ。それをよく考へるがいゝ」。

私は心も狂ふ程にありましたから直に飛び付いてその足が地につくやうに引き下しました。

今は天の子と地の子とが地上で揉み合となりました。

下の小草はすべて蹂躙されて、われ〳〵の足の下には只砂

ばかりになりました。塵は銀の砂のやうに立ッて、われ〳〵の頭をつゝみましたが、困ッたのはわざぢるの手も呼吸もさながら火のやうに熱いことでした。

て、上にあり下になり相爭ッて居ました。が、急に私をわざぢるは踏み布きました。その怒の面色は言ふもおろか。刀を私の咽喉に擬てましたが、さて突きもしません。「まだ貴様が死ぬ時も來ず、また無禮を悔る時も來ないから」。

〇酒鬼（其二）

藤蔭主人

嫁のお須摩は夫の歸宅を待詫て——姑の苦勞を慰兼て、進まぬ足を無理遣に娘の奉公するお邸へ。洗ざらしの前垂とベタ繼の半天に襤褸隱しても、此姿では娘の手前……同輩に面目なしと知りながら。外ならぬ佛の命日、夫の歸宅——滿足に月給を持歸るは覺束なし、氣の毒ながら——厚かましひが娘に會つたら又好い工夫のありさふなもの。當にしては濟まないが御慈悲深いアノ奧樣、此辛苦をお咄申したら……イヤ〳〵よしませうかふ重ね〴〵ではナンボでも。されども……私は兎に角お母さんが…。思案に盡きて半分夢中に出掛けたは作次が歸る五分計り前。月明りにも恥かしき衣裳、一重を通す寒風にがたつく足を…踏しむれば鼻緒の切れさふな下駄履きて小股にいそぎ足。夜目にも忍びて寂しい道を遠廻りに五六丁」。

黑塀にペンキ塗の西洋門。表は質素なれど内福と近所の評判は高塚守正、從五位と肩書のあるそれの省の局長、長官の御覺も目出度今にも次官に昇任と專ら下馬沙汰。靜岡縣士族には屈指の人物、零落凋亡の御旗下の中に一層目立つ出世。何一つ不足なき身分なれど小供の時から鷹揚に育つた殿樣と涙脆き奧樣なれば靜岡縣士族と云へば誰彼となく怪しき筆墨を靑札にて求め給ひ取次の女が眼を圓くせし事も度々あり。見ず知らずさへ斯くなれば御維新までは隣家交際の山澤作次、初めそれの省へ出仕して二十五圓を頂戴せし時より度〳〵の有爲轉變をも救はれしが。作次が酒好——親子夫婦の間を忘るゝほどな酒癖には愛想をつかし給ひ、寄附るなとの强い御立腹。夫ではお須摩さんがお困りだらふから、アノお時坊でも世話しませふト奧樣のお取成に近頃は小間使代りに作次の一人娘は引取られ。愛敬あれば朋輩にも可愛がられ四十路を過ぎて子の味を知りたまはぬ奧樣にお時〳〵と召使はる

ゝはお母さんにも祖母樣にも羨まるゝほどの幸福。晝の中は奥樣のお傍で裁縫の稽古、夜になれば朋輩と一所に女部屋で殿樣のお手本を一生懸命——「お時さんは感心だよ」と意地悪な御飯焚が褒めるほど。お菜の善悪書生の評判に合す調子は唯笑顔ばかり。「お時さんの家は‥‥」と云れ影口は聞流しにする怜悧者。十四には長た心持も貧乏が藥になつたと親は云ふまいが、年の行かぬ頃から人並ならぬ苦勞をした故に今の有難さが身に染渡る。不自由なく三度の御飯を戴くにつけ、今頃はト祖母や母が思出される。今日は忘れもせぬ祖父樣の命日とて、殊勝にも戒名を硯箱の蓋に張て天神机の上に据へ、奥より頂戴した窓の月を供へて心に供養。今夜計りは手習を休みて伏拜み〳〵、脣から洩るゝ南無阿彌陀佛。能辨家の聞ある——意地悪き御飯焚はヌット後に立たまゝ呆れ顔、沈んだ調子で「お時さん‥‥」。忽ちにフヽヽと笑ひ出しトッパクサと部屋を出たが頓て奥の方でオホヽアハヽ。はしたなきは奉公人の常、奥樣の苦き顔が目に見へる。しばしたつて人のけわひが部屋の外に、間もなく板の間を踏む音ドタバタ。又誰か‥‥とお時が怨めしさふに障子を睨む時、微かに耳に入るは勝手口で忍び聲「御免下さいまし‥‥」。ハテ‥‥どうもお母さんの‥‥ト首をかしげ、何の爲でもなく机の引出しに手を。誰やら取次に出た樣子に立かけて坐りもやらず。御飯焚は大聲に「お時さん‥‥お母さんが」答へる間もなく飛出したお時、思ひ出した樣に立歸つて机の引出を何やら探し物。再び「お時さアん‥‥」。「ハーイ今‥‥」。返辭と共に探し出した紙包を帯の間に常にも似ぬ駈出し方。出合頭に御飯炊「エゝ危ない‥‥」。「そさふ御免下さいよ」と口の中。勝手に出れば寂しさふ月がさし込む土間の隅に母親、薄闇でも容姿で知れる娘。

「お時かエ」

「お母さん何ふしたノ、今頃」

「少し子、お前に用が有て‥‥」

いつの間にか中働の下女が

「お時さんのお母さん、お上んあさいナ、其處は寒いから」

「イヤ有難ふございます、お時がいろ〳〵お世話になりまして」

「イエこちらこそ御厄介になりますんデスわ。サアお母さんお上んあさい‥‥お時さん、お前さんも何とかお云ひナ子」

「イヽエどふぞお關ひなく」

「おいそぎ……ソレジヤアらんぷを」

「どふぞモウお關ひなく」

「それでも暗闇では」

「お倉さん暗闇の方が好いノ」

「デモ……」

と言葉を殘して行くわとを見送る娘――母、諸共にらんぷを恐れる同じ心、介石祖師の御弟子とも思はぬに――前世は黒闇國のもぐらにてもわたつ事か、

「お母さん、今日はお祖父さんの御命日ネ」

「ソレデ今夜來たノサ」

「サウ私しも明日朝はヤアく――お奧でお眼覺のない中一寸行かふト思つたノ」

「サウカエ何しに」

「何しにッて佛樣の日だから……。」デモ お母さん今日はお机の上へ戒名を飾つてお菓子を供へたわ」

「サウ……佛樣が……サヅ……」

うるみ聲。闇りで見へねども嬉しさは顏に顯はれしならん。

お時は帶の間から紙包を出し聲を低くして、

「それから是はお小遣の餘りを溜めたノ、お寺參りのお花代になさい」

母は紙包を取りて押戴き「お時、濟……濟まないが」と云つた計。跡は眼に當てる古手拭と共に濕り勝。お時はわざと元氣らしく、

「イヤだよ泣てサ、ほんとに少ウしよ」

母は手を合さぬ計。道端に百金を拾ひしよりも喜ばしいは娘が呉れた紙包。頭の飾り流行の衣裳、何呉となく欲しがる年頃でありながら、ねだる母親にねだられて――ねだられぬ中に心附けるとは。世間並に育てもせぬ此親を親と思ふて孝行を盡すしほらしさ。今は娘とは思はぬ、心の內では――忝じけないぞお時樣。

口先の追從にらんぷを持て來ると云ひし中働は調子高に、

「お時さん、奧樣が召しますヨ」

「ハイ唯今、ジヤアお母さん又二三日中に。奧樣に……イヽエ今夜はお目に掛らない方が……。御加減が惡いから、ア、跡で私が申上るから……」

「それジヤアお前から宜敷」

と云ひながら立上り「皆さんへも」と言葉を跡に後姿をチッ

と見送るお時。染分の毛糸で編んだ手襷が羽衣と見えるほど有難き志ざし。「お時さん」、「ハーイ……唯今」。

寄書

○川猝月

帶のごさすがる野川のかた淵のよさみにうかぶ春の夜の月

○都落花

大路行みやこをと女のきぬ笠ゟふりとけかゝれ花のしら雪

○安部仲麿

もろこしの雲井まてこうてらしけれ三笠の山の秋の夜の月

西京　池袋清風

○女子の文學に付ての駁論の横鎗

湯谷礎一郎

英學一刀流の御大將本門の君に物申さん御大將には和漢（假に一として）洋折衷二刀流なる池袋の君のものせられたる女子の文學てふ演説に對して尖鋒鋭く横面を撃ち拂ひて大音聲、

六七年前ならば……陳腐說日新の今日に於ては採るに足らはぬ迂闊論……

靑年女子は泰西日新の學を修めて新奇なる事を知らざる可らず……日本の事は旣に昔に關するものなれば吾人はむしろ英學を熱心學ぶべきなり……

流石は一刀流の切味御手の內鮮か實に左候はん也殊とに御大將の眼球より見下せは——左はさりなから御大將暫く〳〵、チイツレ、ト助太刀申上ぐる譯に參らぬふしあれはイザ是より言上仕らん。

抑今日我邦の學問上の地位吾人靑年男女にさりては甚た混雜迷惑の時代ゟて自分氣儘の道樂以間なれは兎も角苟も身を現今の道場に躍り出して一仕合仕らんには矢張時勢に應して池袋君の御說の如く——日本學者の公論の如く——東西の二刀を提けなくては立合ひ難き次第、决て不思議何も不思議でも奇妙でも陳腐でも迂濶でも無之候敵を料つて戰ふは兵家の常、病に應じて藥を投するは醫者の道籍し池袋君の此の說ある夫の日本帝國現今緊要なる學問の地平線外ゟ立ち働く外國女敎師——狗ほ御大將の如き人の——弊を見て感激是か動機となりたるに職由するとき存する也御尤至極——吾人平凡なる若武者の眼にはト——自分も同感評判して喇叭をふかん自分か學友なり先輩なりの實驗しゝたる報告書によれは壇上に仁王立して舌を振ひ手を動かす時は人も感服し自分も感服するが扨さ對話する時は學說の高尙なるに敬服するが其人の御家を拜見せば、サー、言語同斷御腰は竹光切て赤い血は中々出ないアッパレ一夜仕立の御武家樣むしろ御仲間——哉と道場の面々は大笑ひサ——是ても御師匠樣の免許濟みとは、イー、誰が思ひマーショー是が反對を學ぐれば和漢學の下地の有つた學友は早く出精した、中村先生が昔ても罪つて申さん池袋君にして若し英學は無用だ泰西の學術はダメだ、と申されしならば兎も角併行兩立雅進めと申されしなるに直に陳腐だ迂論ださはちさ聞ねないのし玉ひし漢學不可廢論は後進の指南ゟして說し是に外ならざるべし。

何故なれば今日は——明治廿二年なるを記臆せよ——今日の現象に付ての議論にして決して未來の預言者さしての議論にあらざればなり今日の現象は和漢洋を要する時代なればなり——地下の森君は御大將の說をきゝて將ひねつて微笑し玉はんも——英語學は日本三千九百萬の人民が固有通有の性質にあらざればなり或る學者等は勿論日本の文學に失望せらるゝあらざるも今日現在の日本女學校の姬君が擧て洋學專門の女學士として——むしろ和製の毛唐人として——社會に舞ひ出玉にもあるまじく矢張り多分の方々は大方睒度ホームの女主として出陣まします なるべきものさ推察仕る也然れは其敎育し玉ふ公達や姬君は決して赤髮碧眼の毛色の變つたものでなく矢張り日本を相續する日本人だと斷定仕る也然すれば泰西の文物は如何に日新だ新奇だと言つても日本の境遇に成長せぬ種子は蒔く譯には參りますまい——事實——識者か公論——日本從來の風習殊に日本の元氣は保存せねばなりますまい抑國語や國の學問は住民とは密接なる大關係ある事は無論でショー——と申すものゝ强ら大和言葉のくだ〳〵しきを一々氣長に仕入するではありません假令日本の言葉も學問も不完全だ漢文學も時勢に迂濶だと言へば云ふものに新奇〳〵と洪水の出掛の樣に俄狂言の陶治的に着物の片袖引き掛て駆け回る譯にも參りますまい——結論——故に現今の日本の舞台にて活劇を演するは其容觀に應じて東西の兩刀を提ねばならぬ若し和漢の下地のナイ不具武者ならば其れこそ時勢にふさわぬ人形なり若し池袋君の說が七八年前の陳腐論ならば御大將の御論は數十世紀後の——若し應する事ありしならば——預言かも

詫々御兩所の御說を詳にせずして飛出すは若武者の習ひなれば とて嗚呼なる沙汰の限りに侍れど日本の女學上隨分價値なる論題ですから早る心の駒に鞭あてゝ御前に見參仕候未た呼吸もおさまらされどもチ……ヲ……御立合ひ下さるや否や……ヲ……御大將

自由の政度より發論の自由を排除し得ば亦宇宙より太陽を排除し得べし。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

開書

○同志社大學慈善音樂會發起者に送る

（上略）別冊は經濟雜誌にも揭げ候者なるが可成くは多くの婦人に知らせ度希望を有すと投書者の話に御座候依て御供覽申し併て小生が此事に賛成の意を表ずるの義務として貴覽に前條御願申候也匆々頓首

伴　直之助

○同志社大學寄附慈善音樂會の不經濟

予輩は一昧妄りに騷ぐことを好まず、徒らに華美なることを厭ふ節し其の爲す所、其の費す所は不生産的勤勞なり、不生産的消費なればなり、故に自から喋々として之を誹しみ、他人にも然かせんことを希望するは自然の順路なるべし、然かれども之れを我が國の形勢と云はん乎、或は風潮、氣速、流行とでも云ふべき乎、諸事萬事何となく、予輩の意見に反對するは、いと歎ずべきことにこそと思ひつゝある折も折、「慈善音樂會の顚末」と題し、一方に「同志社大學校設立の爲東京有志婦人の寄附」との肩書ありければ、成程之れは該大學校の爲めに去四月中基督教徒有志の令夫人令孃の催うされたる音樂會の顚末なることを知れり從て諸氏が熱心奇特なるを賞せり次で其の會計の部を見るに、入金は金三百〇二圓十八錢にして、同志社寄附金は僅かに金百〇三圓二十二錢なることを知れり、左れば收入金の三分の二は諸費に拂ひ出したるなり、予輩之れを見て發起諸氏が志大に嘉みすべくして、方便の大に拙なるを惜しまずんばあらず、諸氏が目的は家事を投げ棄て、勉强の時間を潰し、多くの車代を費やし、世間を馳け廻はりて、有力者若しくは慈善家らしき名譽を博さんとするにはあらざるべし、予輩は信ず為金を多く集めて、成るべく多くの金員を同志社大學發起人の手に與ふるの一事にて諸氏が正直の目的ならざるべからずと、然かるに何ぞや左の如き計算を見んとは

收入	金	支出	金
賣券料	円 二三九、三九〇	諸入費	円 一九八、九六〇
紳士寄附金	七二、八〇〇	、、、、	
合計	三〇二、一九〇		一九八、九六〇
		差引同志社寄贈金 、、、、 、、、、	一〇三、二三〇

見るべし、同志社寄贈金と寄附金とは僅かに金三十圓四十三錢の差なることを（慈善音樂會の報告には收入の部に於て金一錢の誤算ありと見ゆ故に同志社寄贈金額に付き同報告と予の計算とは一錢の相違ありと知るべし）語を變へて之を言へば、有志の寄附金をも少し集むるときは、慈善音樂會とか何とか大層らしき看板を揭げ、廣告引札を配付し、諸氏が相談寄合に、氣根と辨舌と時間と勞力とを徒費するとや、衣服を切らし車代を損して馳け廻ることや、郵税其他種々の損失を爲さざるも、諸氏が寄贈せし金百圓位の寄付金は直ちに集まりしや必せり、更らに露に之を言へば諸氏が大騷ぎを爲げたる其の結果は、僅かに金三十余圓を集め得たるのみにして、金二百圓以内の金は可惜無益に消費せられたるなり、是れ甚しき無勘定なり、諸氏の爲す所諡し適當と云ふかべらざるなり、思ふに同志社へ寄付せんと望みし有志金の三分の二を消費するに於ては、彼れ有志者は決して滿足せざるべし、人あり若し之を見て御察禮なりと云はば、諸氏は果して之を斥けらるゝや、如何、予輩が見解を以てすれば、身の不肖を顧みず、敢て諸氏に向ひて、少しく謹愼せられんことを希望せざるを得ず、予輩は眞に諸氏の氣力を愛す故に之を撓むるの必要を思ふなり。

○之れに答ふるの書

井上二郎

萬事必らずしも經濟上の點よりのみ申されまじくと存じ候、但し若し其の致し方の全く經濟の極秘を得しやと問わば勿論不完全の箇條も可有之、然し夫は他の芳志を以て十分に償ひ可得と存じ候、況んや寄附者の金は若し此の會なからんにも果して尙ほ空に寄附せらるべきか尤も疑はしく候。依て望む、發起者は之を以て經濟上に學ばるべく、投書者は之を以て慈善の精神に學ばれたし、精神は金を造る、金は精神を造らぬものに候。

時事

（本號余白に乏しく不得止六號字に改む讀者諒焉）

○如此き教育家

もみぢ

ペスタロッチの高弟にフレーベルと云へるあり、始めて幼稚園を工夫したる人なり。ペインター其教育史中に記るして曰く、氏は容貌愚なるが如く、人世の習俗に全く頓着することなし、然れども常に只一つの嗜好、只一つの觀念、只一つの盛力を以て萬事を貫ぬき、之れは之に接したる總べての教師を、其の地位の何如なるに關せず、其の信仰箇條の何如なるに關せず、其の政黨の何如なるに關せず、悉く之を吸引して一種の大魅力を吹掛るが如し、彼は熱信なる基督教徒なりしと云へども全く宗旨に關係せず、萬事に改革的の思考者なりしと云ども實際に過激の改革を行ふことを爲さず、純たる世界論者にして全く人類の愛し手なりしと云ども亦熱心なる愛國的日耳曼人なりし、其論は不精密其談話は不須序不明瞭なり

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

しと云へども其の人心開發の教育法に至ては卓拔ュ實際的組織的有効的なりしさ。噫日本よ、汝ぢは今まに於て此如き教育家を有する乎、教育家は必らずしも利口なるを要せず、必らずしも萬能功的の才子なるを要せず、先づ第一に斷乎さしたる唯一の理想、唯一の決心、唯一の愛念なかる可らず、而して今の日本は果して能く此如き教育家を出し得る乎、如此き教育家未だ出でず如此き子弟の出來らんと殆んど天外を望むの歎あらんとす。　噫今日の日本帝國は書記、属官、を要すると少なし、大改革者を要すると尤も多しと記臆せよ。

女學子曰く、學校の騒動一治一亂、大學の獨立策巧言令色、未だ知らず藩閥は是れ黨員の製造、思はざりき教師飄蕩汚れ汝ぢを棄てゝ孤子と爲す。垣破れたれども窃かに出でず、門開けたれども遠く歸らず、滿校の和氣殺郁全舍悲さく閑雅護臨たる、政治亂暴時代の桃原は抑も何處にありや。

○感化院

感化院は彌よ擴張の計畫あり、府下駒込曙町に家族法に適當する院舍の新築に着手せんとす、其構造は尋常家族四室、幼年家族四室、待遇家族二室、分房四室、幹事房一室、見張所二室、講堂學校工業場事務所賄室賄所浴室等總計一百六十坪に達するの建築なるよし。　願くは其の院舍の一新し增大すると共に、其感化力の益す新鮮有力ならんとを。

○團十郎とお輕　みどり

茲に今の河原演劇流は恥かしき業なりと云つて賤業するものあらば、人之を贊成すべし、此時に當つて之を美術の敵なりとするものなけん。　今まの演劇も次第に進化し、先づ舞臺に於て血を見せぬやうに成り、又不潔なる淫技を禁ぜらるゝやう成り行かば、何如なる改良論者も之が贊成すべし、此時に當つて之を美術の敵なりとするものなけん。　獨り團十郎が茶屋場のお輕の戲に當てらるゝを嫌ひしを見て何故に訝む乎。　誰かお輕の演技に於て何等の美もなしと云ふものあらんや、只だ其美の未だ高尚ならず、未だ純全ならず、漸やくにして今日の時世に適す可らざるを知り來れるを忍める故のみ、此時に當つて團十郎が之を演するを否なむは極めて賞すべき事にあらずや。

大凡そ社會を觀るものは種々の眼孔あるを要す、何んぞ常に一本道の論法によりて輕々萬事を斷論し去るとを得んや。　然りと云へども其の道德の議論に至りては之を如何なる地位に於ても容赦するの不用なるとあらず、好し時勢の止みがたきに由りて時に必らずしも最高純全の道德を主張し得ざるとありさするも、若し人ありて一生を其の高きに進めんさするものあらば、其の何の時たるに關せず之に贊成せざる可らず。　思へらく極美の美術は不道德の元素を含むとを許さず、故にお輕の類を不可さして之を斥ぞくるは美術上一段の進步たり、例へば血を見するを止めにし、不潔なる淫技を制するに至りしと同日の論に歸す。　團十郎氏是を擧げて道德上美術上に一段の進步を爲さんと欲す、而して之を制止し、排斥するものは云く吾よく美術を知るさ、此の如き美術は抑も何等の美術ぞ。　論者乞ふ期せよ、數年後、日本演劇に娼妓類似の大主人公を入るゝとを許さゞるの日到來せんさき、論者は尙ほ是れ美術上の退步なりさし悲泣するや否や。

女學子曰く、姦淫を骨子さして小說を書き、特に惡人を主人公として演劇を仕組むとあり、若し能く其自然を寫し得なば如此きは實に面白し、啻に美術上に面白きのみならず、道德上にても益する所ろ多からん、之れ吾人が嘗て論述したる所ろにして「みどり」生も亦た同論なるべし、但だ此に云ふ所ろの問題に關しては、論、實に別主旨に入るを知らざる可らず。

○山川氏の母勝賢院（二）

山川二葉

前號に其大畧を記したる所ろ、二葉女史より更に左の逸事を送らる、依て茲に掲げて尙ほ前の記を補ふと云ふ。

山川勝賢院夫人の事は已に二三新聞にも掲げたれば茲に之れを畧して其逸事を掲載すべし抑夫人の配重固氏（即浩氏等の父）尤子女の教育に力を用ふ浩氏の幼なるや魯鈍にして甚讀書習字等を嫌ふ且文事に不敏にして一句の文章素讀百回猶記臆し能はざることあり重固氏訓誨百方朝夕倦す或は嚴に或は溫に勸奬教導往々朝より夜半に達す夫人常に傍に在りて之を慰め之を勵し夫重固氏外に出れは夫人代りて教授の勞を執れり浩氏常に人に語りて云予が父の嚴肅勤勉と予が母の溫和奬勵との教育無りせば予は目一丁字を識らず日常往復の文章も尙且書する能はざるの一武夫たりしならん父母教育の恩の高且大なるは天地も啻ならざる也と以て其教育の厚きを見るべし。

夫人の未亡人となられしは四十四歲の時にして長女二葉子十七歲長男浩氏十六歲二女三輪子（櫻井氏に嫁す）十四歲三女操子九歲二男健次郎氏七歲四女常盤子（即德治氏の配）四歲五女捨松子（大山氏に嫁す）一歲なり故に操子以下の起臥飮食總て夫人の手を煩せざるなし浩氏十九歲にして藩命を奉して京師に赴き家に

在す之より先二葉子は他に嫁し二女三輪子も亦嫁して夫人の勞を分つものなし舅兵衛氏年八十矍鑠能家事を總理すと雖も日常の事は悉く夫人に委す故に外親戚の交際内家事の整理子女の教育等一切夫人の手に辨す二葉子三輪子の婚儀も皆夫人の料理する所たり當時會津藩子弟の教育に尤力を用ふ文武の學業は青年子弟終身の浮沈に關せり故に健次郎氏の日新館に（即藩學なり）入るや毎朝日出に先ちて夫人自ら起て同氏を喚起し當日要する書籍筆墨を整理し直に机前に對して勉學するを得せしむ其夜學に出る時の如きは往々夜半を過く夫人必す燈下に紡績して氏の歸るを待ち其夜學修せし課程を質問し其勤怠を監督す寒夜の如きは親ら衣服を煖め或は菓餅を供へて其苦學を慰む侍婢數輩ありと雖も必其手に委せす身親其勞を執れり女子の教育も亦日常の起居動作手習機織裁縫等に至るまて課程頗る嚴なり然とも細行の如きは深く之を責めす事行も志操上に關するとあれは細微と雖も毫も假借せす男女を問はす或は暗室に投して中心悔悟するを待て始めて之を宥す其嚴も亦如此。

夫人性活潑頗る俠氣あり常に强を挫き弱を助るを好む嘗て權貴の爲に聊も意旨を曲けす貧困不具の者の如きは常に意を盡して之を哀憐せり又世人の西洋に心醉するを惡む故に往々矯激の言行あるを免かれす常に云日本人にして日本魂なきは日本人にあらす今の官吏輩は一も西洋二も西洋徹頭徹尾彼赤髯奴の行に擬倣し靦として恥るなし彼輩何そ猿を西洋に移して赤髯奴の隷僕とならさる又甚舞踏を嫌ふ一夜夜會に赴き舞踏を觀る即云何等の醜態何等の怪事そ堂々たる有髯男子にして何を苦んてか如此咄々怪事をなすや他日我か上流社會の風俗を壞亂するものは必す此舞踏ならん又立食を評して云施行寺前乞食の集合のみと然れとも彼頑固者流の如く百事西洋風を嫌ふにあらす其學術の如きは深く之を信して頻りに青年子弟を誘導勉勵せしむ。

夫人青年子弟を愛す浩健次郎兩氏の門下より出て身を立るものあれは之を悦ふ己の子の榮達を見るか如し然とも其正邪を分列する甚嚴肅なり故に少しく佞奸の行爲ある者は親戚の子弟と雖も敢て假容せす直に面折し或は言語を接せさるに至る。

夫人七十の賀に觴健を書かせ左の歌を題して宴席に掲けられたり其物に拘はらざる如此。

　現に角にいのちのかきりたのしまん
　　かゝらん後はさもあらはあれ。

其他四五首の和歌を左に錄す以て平生の風采を想像するに足れり、

題しらす　大君にけふたてまつる初若菜つむとも千世の數にかそへん。

夏　月　行水は清瀧川の早き瀬に影もとゝめぬなつのよの月。

祭中郭公　百敷の大内山の郭公木かくれてたにきくよしもかな。

雪下某か植置し松をみて（雪下某は浩氏の門生也海軍少尉となり西南の役に死す）

　なき人のかたみの松よ己のみ何に千歳の色をうふらん。

題しらす　風さそふ露よりもろき老かみを哀と思へ野邊の秋萩。

○佛國に於ける萬國婦人會

佛國にて開く本年の萬國博覽會を機とし、萬國婦人會を開らきて大ひに女權擴張の運動を進むべしとの議は前年より確定ありぬ、此は本誌數ヶ月前の分に於て既に報道したることなるが、思ふに今や既に其の爽快なる幾多の議決を定めたることなるべし、吾人は來るべき新報によりて之を確知するに先だち先づ預じめ種々の想像を畫きて獨り樂しむものあり。何んとなれば今を去る凡そ十一年前に當り、パリに於て同じく亦た萬國博覽會のありし節、女權雜誌（Le Droit des Femmes）の記者レラン、リーヘル氏の主唱によりて萬國婦人會第一回を開きたるが、當時世論の囂々として笑ひしにも關わらず、此會に於て議決したる、女子高等教育請願の事、女子が大學傍聽を許すべき事、女性に對する保護晉信等の制限撤去の事、女囚の爲に別に牢を設くる事、離婚法制定の事、等は以來着々として皆な悉く實行せられ、其例外國に及ぼして遂に廣く各國の女權伸張に對し大ひに助くる所ありしことを知るが故也。聞く本年の會は此の前回に續くものなりと云ふ、果して然らば其の議決する所ろ、議決の聽かるゝ所、既に察すべし、故に吾人は預じめ祝し又預じめ祈る。

○第一の女編輯家

米國に於て年給を受取ると尤多く、（年俸三千弗）文名を顯ろかすと尤も高き女編輯者は、ハーパース、バザールの編輯長メリー、エル、ブース夫人なりき。悲しひ哉享年六十才にして今年殘り惜しくも永逝したるが、此頃ろ其の最親の友メレーは之が傳を記して云へるとあり、云くブースは幼にして學を好めり、然れども父母の贊成を得ざるに由りて十分の教育を受ると能わず、幸ふじて獨學し、時に新聞雜誌に通信して新版書籍を貰ひ受け、獨り之を研究して獨よ獨學したり。後ち紐育の都に出でゝ晝は裁縫し、夜は孤燈の下に各地女子の景况を綴り、時に之

な數社に投じて更らにいよ〳〵新書籍を受けたり。此等の時に於て女子が新聞事業に關係するは殆んど絕類の事たるのみか、寧ろ人は之を口にするをも恥ぢたるにより、其父はソースの事を人に語るをも常に躊躇したりと云へり。左ればソースは亦た黃金によりて其の文章の報酬を受くる等思ひも寄らざりしとなりしが、年月彌よ捗どり、女學大に進み、彼が文名も漸やく高くなりしかば、遂に一二の書を反譯して出版するに至り、遂に亦たハーパース會社に招かれて彼のハーパース、バザールの編輯に從事するに至りき。一と度び之に從事してよりは、全身全日を擧て悉とく之に盡力し、夏季三週間の休暇と、晚年衰弱によりて半ケ年歐洲に旅行したるとの外は、未だ嘗て一日だも執筆監督を廢したることあらざりしと云へり。而して今日は合衆國中到る所ろに女記者多く、所々の新聞雜誌社に於ても多く女性の助手を用ゆるに至りたりしこと四五十年前ソースが當初の困難に想ひ合はせて天地の相違ありと云ふべし。當今日本文檀に先驅したる女秀才が、其妨害故障に出で遭ふとの多きは勿論當然の運命なりと覺悟すべし。

○親の老少と子供の强弱

出產する時の親の老少は、必らずや子供の强弱に關係すべし、然るに從來此の事を尤も精密に調査したる人と云ふは多からざりしに、近頃ホンガリアの學術學校會に於てジヨセフ、コロシ氏か演述せられたるは極めて精密の研究なる如し、氏は凡う三萬の實例に試驗して后ちに概括して曰く、二十才以下の母、廿五才以下の父に出來たる子供は割合に弱し、其の尤も丈夫なるは二十才以上三十才以下の母、二十五才以上四十才以下の父に出來たる子供なり、故に最良の婚姻は夫が妻よりも年上へなるにありと云へども、若し三十才の男三十五才の婦人にして相婚する時は之よりも更に年若き男に嫁すれば健兒を擧ぐべし、又三十才以上四十才の男子にして初めて婚する時は二十才乃至三十才の女子を娶ると可とす、而して之を大體より云へば凡そ夫に超ゆる五年以上の老婦人には決して健全の玉兒を產すると能はず(本年一月米國ポプリツク、ヲピニヲン)。

庀　之

○皇后陛下御誕辰　本月二十八日は陛下の御誕辰日なるにより、次號の女學雜誌は特に大附錄を添ねて少さか祝意を表し奉らすべし。

●ラマバイの著書　印度高族婦人狀態と云へる一書買入の事は、本社に申込の部數丈けを、教師伊勢時雄君渡米せらるゝ節に、其の直汁文を委托したる處去る十五日無恙着したり、吾人は一讀の上其の大器を拔擢するともあるべし。

○文秀女王殿下　には過きに栃木縣下日光へ旅行せられしが去る九日歸京せられ同十日出發にて奈良縣下へ赴かせられたり

○女子俱樂部　麴町區中六番町十七番地島津玉女史を始め元の女子師範學校卒業生二三名の發起にて今度女子俱樂部なるものを創立し專ら女子社會の交際を厚うし智識を增進するの目的にて漸次擴張の上は一の女子實業學校をも設立するの計畫なる由。

○慈善音樂會　去る八日東京盲啞學校の爲め一ッ橋外東京高等女學校に於て開かれたる慈善音樂會には來會者殊の外多く四百人餘に及びたる由にて中〳〵の盛會なりしと云ふ。

○日本音樂會　は本日午后八時より鹿鳴館に於て開かるゝ由なるが此度は有名なるヴアイオリン家ヂトリヒ氏の音曲ヂトリヒ夫人の獨唱歌にヴアイオリンと洋琴との合奏もあるとのとなり。

●東京第一の納稅者は女にあり　東京全市最高納額は京橋區靈岸島四日市鹿島のぶ(女戶主)氏にてその稅額は千九百七十圓八十三錢なりといふ者し女子にして市制第七條に省かれずば最大多額の納稅者たる三氏(德川茂承侯、杉村甚兵衛氏、村越庄右衛門氏)の上に出づべし。

○高知縣下の女況　高知縣下には婦人興風會、婦人尙風會、長岡婦人教育會、佐川婦人交際會等ありしが其主旨目的共に大差なきを以て此度一致結合して高知婦人會なるものを組織するとに決し此程其の趣意書規約書を規定し且つ役員をも撰定したる由因に記す婦人興風會、婦人尙風會の二會は基督教徒の組織する處にして其他の諸會は重に師範學校卒業生及び女教師の組織に係るものなりと云ふ

○下の關婦人會　長州下の關の有志者は近來婦人に關する教育の必用を感し昨年以來女學校の設立を思ひ立ち貯金の方法を設けられしが先づ第一着に馬關婦人教育會を組織するとに決し不日開會式をなす筈なるよし。

○八幡婦人教會　滋賀縣下蒲生郡八幡の婦人教育會は昨年八月頃に發起せられしが今年に至り次第に隆盛に赴き目下會員の數も百六十餘名に及びし由。

○長野婦人教會　信州長野の婦人教會は次第に盛大に赴き規則を改良し科業等を設け每月三回づゝ開會し會員を甲乙丙丁戊の五組に區別し受持教師を撰定して倍々擴張を計らるゝ由。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

○前部婦人矯風會　は設立以來日尙ほ淺きも會員の增加著しく目下日の出の勢なる由。

○柞原矯風會　は備後國三原の有志者の創立に係り京都の反省會と連絡し專ら禁酒進德の主義を擴張せらるゝ由。

○福岡婦人會　は去る十一日總會を開き一年間の報告役員の改選等をなせられたる由。

○米國人ハルリス氏　昨年十一月世上に發表せられたる同志社大學設立旨意書中に記載ありし一萬弗の寄附者米國人ハルリス氏は兼て同志社敎育の主旨を賛成し居られしが彼の旨意書の英譯文を見て益々感激し今度同志社大學中の理化兩專科を設立して大に同社學術上の進步を圖らんが爲め更に五萬六千弗を寄附せられたり因て兼て同社より理化學專修の爲め米國に派遣し當時ジョンス、ホップキンス大學に勤學中なる下村孝太郎氏はハルリス氏の依賴にて一兩年の中歸朝致し書籍器械購入の上理化專門科の開設の運びに至るべき筈なりと云ふ。

○正誤　前號の紙上日本赤十字社記事中看護者卒業者へ卒業證書を附與せられたる旨を記載せしが卒業證書は修業證書の誤に付き此に正誤す。

外報

○男女の心臟　此頃ろ男女の心臟を比較して計りしものありしに、男のは三百三十グラム、女のは二百六十グラムなりし由、ボストンダーリー新聞に見ゆ。腦の輕重によりて智力を判斷する論者は今や女は其情も亦た男子に劣ると云はねば相成るまじ。

○支那の傳道　本年一月チヤイニース、レコルダーに掲げたる最近の報に云く、支那にある外國宣敎師は夫婦及未嫁孃合して千百二十三人あり前年より增すと九十三人、土人にて敎師となるもの百六十二人、未だ按手禮を受けざる土人の助手千二百七十八人、信徒三萬四千五百五十八人、前年より增すと二千二百九十五人、學校生徒一萬四千八百十七人前年より增すと千百四十八人、本土敎會寄附金四萬四千百七十三弗、前年より增すと五千九百三十六弗。

○英米書籍出版比較　去年中にて比較すれば左の如し(ボストン、ヘラルド)

書名	英國出版部數	米國同上
小說類	九二九	八〇八
神學書類	七四八	三三九
法律書類	一一五	三二九
政治社會上書類	一一一	二〇〇
歷史類(傳記を含し)	三七七	一一〇
美術書類	一八四	一四三
敎育書類	六九〇	三〇六

○ハーパース、バザール　前編輯人ブース夫人の死せしとは前號に記したるがマルガレット、サングスター夫人其の職を嗣ぎたり夫人はハーパース、ヤング、ピープルの發送部に勤めたる人にて、女政權贊成家の一人なり。

○テンネッシー　米國同州の知事テーラア氏は婦人をして學務局長被選擧權の資格あるべしとの議題に調印したり。

○女齒醫　米國合衆國に一方六千人の齒醫あり、中ち六十人は女なるよし。

○保護年齡　妙齡の女子を保護する保護年齡は米國中州によりて異なると左の如し、(四月六日米國ウーマンス、ジョウナル)

デラワル　七才

アラバマ、カリフホーニア、コロラド、フロリダ、セチルヂア、アイチヲ、ミンネソダ、ミッシシッピー、ニウセルセー、北カロリナ、南カロリナ、テキサス、マリーランド、ウタ―、モンタナ、ニウメキシコ　十才

バージニア、西バージニア、ミッソウア、ケンタツキー、インヂアナ、イダホー　十二才

イリノイ、ミシガン、ヲレゴン、ウイスコンシン、バーモント、ヲハヨ、コンネクチカット、マッサチウセット、アリゾナ、ダコタ、ワイチミン　十四才

ネブラスカ　十五才

ペンシルバニア、ニウヨーク、テンネッシー　十六才

カンサス　十八才

ロードアイランド、アルカンサス、ルイシアナ　不定

○米國桑港日本婦人慈善會　同會の第四回は四月十七日午后八時より美以美敎會堂に開き祈禱讃美の後ハリス夫人は日本語にて女子の爲すべき務を勸め園てる女はナインチンゲール女史の傳を演し江口マス子土居みす增田コウの諸姉妹及び大澤榮之丹森太郎兩氏の演說あり終りて會長より義捐金を募り一同に茶菓を供せり同會の通常會員は每月廿五仙名譽會員は金十仙を納め會頭幹事五名を置き在留女子の困難に陷るものを助け其他の慈善に關する事業を爲す由。

編輯主裁 田口卯吉

經濟雜誌社編輯

編輯主裁 川上廣樹

日本社會事彙

豫約募集廣告

弊社夙ニ國家無二ノ寶トナスベキ、百科全書ヲ編成セントト欲スルノ目途アリ、然レドモ、此事業タル、一朝ニシテ成シ得ベキモノニ非ズ、是ニ於テカ、先ツ泰西政事類典ヲ譯述シ、尋テ大日本人名辭書ヲ編輯セリ、皆此目的ヲ達セント欲スルノ主意ニ出デシナリ、今ヤ文物開進、日一日ニ盛ニシテ、既ニ憲法ヲ公布セラレ、國會ノ開設モ亦近キニ在リ操觚ノ事業、豈躊躇スベケンヤ、乃茲ニ我邦社會ニ關スル事項ヲ蒐集編錄シ、名ケテ日本社會事彙ト云フ、抑建國以來、今日ニ至ルマデ、政治、制度、百般ノ事實、其沿革ノ大概ヲ記述スル、其事浩洋トシテ、殆ト際涯ナク、容易ニ完全スベキニ非ザレトモ、浮華無用ノ文辭ヲ飾ラス、務メテ事實ノ正確ヲ要シ以テ政治家ノ腹笥ニ充テ、併テ諸學術上ニ便益セントスルナリ、今其要領ヲ左ニ記シ、大方諸君ノ贊成加盟ヲ賜ハンコトヲ希フト云、

第一 此書ハ、國初ヨリ明治ノ今日マデ、政治、制度、法律、理財、商業、工藝、風俗等、百般ノ沿革ヲ統記シ、頭字ヲ五十音ニ分チ、索引ニ便ナラシメ、且圖書ノ今日ニ存スルモノ、大約之ヲ挿入スヘシ、其體裁見本ニ見ハスガ如シ（見本御入用ノ方ハ郵券貳錢御送付アルベシ）○第二 此書紙數大約四千ページ、之ヲ二卷ニ分チ、背革金字入クロス表紙ニ製本シ、第一卷ヲ來ル明治二十三年七月中ニ發兌シ、第二卷ヲ同十一月中ニ發兌シテ完了スベシ、○第三 此書定價金拾六圓ニシテ、豫約價左ノ如シ（但シ各地送本料ハ別ニ請求ス）

一 本年六月中一時入金ノモノ 金八圓

二 本年六月中ニ半額、明年四月中ニ半額ヲ入ルヽ者 金拾圓

第四 豫約中込期限ハ來ル五月三十一日迄トス、

左ノ諸君ハ此事業ヲ贊成シ其事務ノ事項ニ關シ遺漏誤謬ヲ補正スルコヲ承諾セラレタリ

文學博士 中村正直君
工學博士 志田林三郎君
文學士 添田壽一君
小池靖一君
肥塚龍君

法學博士 田尻稻次郎君
文學士 有賀長雄君
文學士 濱田健次郎君
宇川盛三郎君
森貞次郎君

法學博士 穗積陳重君
文學士 高田早苗君
文學士 三宅雄二郎君
角田眞平君
三木實君

明治二十二年五月

東京京橋區彌左衛門町七番地

經濟雜誌社

四季咲ばら縦覽

五月十五日より六月二十日まで

駒込染井 常春園 伊藤重兵衛

駒込傳中 植木家 高木福太郎

○(倫)(理)(の)(基)○

紙數小形卅四頁
定價金弐錢
郵税金貳錢
（五月五日より發賣）

右は、一小册子なりと雖も、一夫數婦の人情に悖り自然に背く所以を痛論し一夫一婦の正理が社會全体に行はれざれば、今日我邦に最も欠乏せる一家の幸福は得て望む可らざる所以等を切論したる者なり、

發賣 京橋區日吉町 女學雜誌社 京橋區日吉町 民友社 京橋區加賀町 警醒社

Digitized by Google Original from COLUMBIA UNIVERSITY

遞信省認可

同志社大學義捐金の第二回募集取扱廣告

同志社大學義捐金

取扱期限は四月限りの處地方有志者にして當時募集中のものも有之趣に付き更に五月より十一月まで第二回募集取扱期限とし引續き取扱候間右大學設立賛成の諸君は多少に拘はらず金圓相添へ左の各社へ御申込被下度候

一金圓御寄贈の向は之を各社の紙上に其金高並に姓名を掲載し別に受領證を差出さず

一義捐は拾錢以上に限る

一第二回期限は本年十一月卅日を以て締切とす

報知新聞社　毎日新聞社　朝野新聞社　東京公論社　東京新報社　改進新聞社　東京朝日新聞社　江戸新聞社　嚶鳴社　警醒社　經濟雜誌社

女學雜誌社　民友社　大坂朝日新聞社　大坂毎日新聞社　東雲新聞社　大坂公論社　京都中外電報社　日出新聞社　京都日報社　神戸又新日報社

●生徒募集廣告

本館に於ては臨時豫備科を設け次學年に入るべき生徒の準備をなす望のものは至急申込あれ但束脩を要せず本館の學科は和漢學英語佛語獨語伊太利語音樂書學料理法裁縫編物等にして教頭マーサ、ヲルドリッチ孃及内外國教師數名共授業を擔任す

第五月

麹町區上六番町十七番地

開成女學館

發兌					
五月。	四日	十一日	十八日	廿五日	
六月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
七月。	六日	十三日	二十日	廿七日	
八月。	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日

定價			
一册。六錢	郵稅。一錢	(但府内無郵稅)	
十册。五十八錢	郵稅。十錢	(同前)	
半年分	一圓四十三錢	府外は	一圓六十九錢
一年分	二圓六十錢	府外は	三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を掲する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部増の割合と定む

一行一回（廿七字詰）前金拾錢
同三回以上 一割引
同六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道徳なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six months, *yen* 3.12 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町殿々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町頁明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文春堂○横濱住吉町角田屋貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年五月十六日印刷
明治二十二年五月十八日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

編輯兼發行者　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷者　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豊